

佐為と進藤ともう一人
のヒカル

もちもちもっちもち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

逆行憑依した女の子な進藤ヒカルが、過去のヒカルと佐為の仲にぐぬぬ……と嫉妬する話。

作者も意味不明なあらすじだとは思っているので、気になる方は本編をご覧ください。

目次

エピソード	139
まる 7	115
まる 6	96
まる 5	76
まる 4	57
まる 3	38
まる 2	18
まる 1	1

まる1

後藤ヒカリには、自分とは別のもう一人の記憶が存在している。

切欠は今でも鮮明に覚えていた。

転勤族だった父の都合で長いこと特定の地に根付くことのなかった自分は、当然のように特定の誰かと長いこと交流を深めることなど出来る筈もなく、友達と呼べる存在もいなかった。

とはいえ、そのことを嘆いているのかと聞かれれば、そうでもない。

初めての集団生活の場だった幼稚園で、自分は園児達との違いを感じていた。

テンションというか、場違い感といえいいのか、こうだという明確な理由はない。

それでも、何か特別な理由がない限りは一人で過ごすことが多かった。

といつても、別にコミュニケーションという訳でもなく、誰かと遊ぶことは出来るのだ。

だけど、園児達の考えなしで危なっかしい行動にハラハラし、心から楽しめなかっただけで。

まるで先生や保護者視点で物事を見てしまうと云えばいいのか、とにかく疲れるのだ。

そんな感じに、特定の集団には属さず、かといって誰からも誘われないという訳でもない、単独行動を好み、周囲とは程よく上手くやれる、次世代型ハイブリッドぼっち。同年代からは一目置かれる存在だが、実に可愛げのない子供だなど思ったりもした。

「今日から皆のクラスメイトになる、後藤ヒカリさんです。皆、仲良くしてあげてね」

そんなこんなで数年後。

転校を繰り返し、友達も作れずにいる自分を哀れに思ったのか。

父は所属していた会社を退職し、転勤のない職へと再就職。

貸家ではなく、マイホームを購入したことから、この地に永住する気満々なのが伺えて。

いつでも友達を連れてきていいぞと、そう言つて送り出してくれた両親のためにも。そんな気持ちに背中を押され、自己紹介を促す先生の指示に従い、言葉を紡ぐ。

「後藤ヒカリです。南は鹿児島から、北は北海道まで、たくさん場所に住んできました。でも、此処にはずっと住むつもりなので、引越はもうしないつもりです。皆、よろしく」

そうやって頭を下げ、顔を上げた瞬間に待っていたのは質問の嵐。

転勤族、そして自分の容姿故の好奇心というヤツなのだろう。

適当に質問を捌き、先生から言われた自分の席へと足を進んでいく。

その間にも好奇の視線がなくなることはなく、そのことに苦笑していた時だった。

「お前、後藤ヒカリだっけ？ 俺の名前とそっくりだな」

この時のことを、自分は一生忘れないだろう。

窓際最後列、空白の席の隣に腰掛ける男子は、親しみやすい口調で話し掛けてきた。

「俺、進藤ヒカルって言うんだ。今日から隣同士、よろしくな」

金と黒のツートンカラーの髪。

活発な恰好に好奇心で輝く瞳は、一目で彼が年頃らしくやんちゃなのが察することが出来る。

いや、察するなんて次元ではない。

彼の性格や趣味、好き嫌いや家族構成、年の割に小柄な体を気にしていることまで。初対面にも拘らず、相当に親密な仲でなければ知り得ないことまで、全てが分かっってしまう。

手足が震え、呼吸が早まり、ジワリと嫌な汗が浮かんでくる。

思考が混濁し、吐き気すら湧いてきて、立っていられず、その場に崩れ落ちかけて、

「お、おいっつ！」

咄嗟に伸ばしたヒカルの手が、自分の手を握り締めた瞬間。

まるで走馬灯のように、膨大な光景が頭の中に直接叩き込まれるように流れてきて。それが、意識を失う前の最後の記憶だった。



目が覚めて、最初に見たのは知らない天井だった。

鼻を刺す消毒臭に顔を歪め、声を出そうとするが、掠れたような音しか出てこない。

「あつ、目が覚めたんだ！」

明るい氣勢が近くから響き、咄嗟にそちらに向く。

最初に目に飛び込んだのは、綺麗な長い髪。

「先生！」と声を張り上げ出ていく様に、此処が保健室なのだと理解する。

だが、そんなことよりも、先程出ていった彼女の後姿が鮮明に焼き付いて離れない。

「……あかり」

「お前、あかりと知り合いなのか？」

彼女とは反対側から聞こえる声に、ビクツと体が跳ねる。

「……進藤」

「おつ、さつそく名前覚えてくれたんだな。お前が倒れた後、色々大変だったんだぜ？」

先生はパニくるし、女子共は騒ぐし、他の奴等は俺が何かしたんじゃないかって疑っ

てくるし」

「……その、悪い」

「いいよ。こうして目が覚めてくれたんだからな」

椅子の上で行儀悪く胡坐を掻き、それでもその顔に浮かぶ表情に後腐れはなかった。ほつと息を突き、迷惑を掛けてしまった罪悪感に顔を俯けてしまう。

「ところで、さっきの話だけど、あかりとは知り合いなのか？ 名前呼んでたからさ」

「……普通に初対面だよ。さっき名札がチラッと見えたから、名前を呼んだのはそれだ」

「ふーん、そっか」

納得顔のヒカルに、咄嗟に付いた嘘が成功したのだと安堵する。

「後藤さん、大丈夫？ 気分とか悪くない？」

「……問題ないよ。心配してくれてありがと、藤崎」

保険医を伴い、やって来た少女——藤崎あかりに礼を言うと、良かったと胸を撫で下ろす。

その様をマジマジと見てみると、保険医の先生がヒカルの背中を押した。

「さつ、進藤君は席を外してちょうだい。今から後藤さんの診察をするんだから」

「な、なんだよ！ 俺だけ仲間外れとかズルいぞ！ 先生のケチ！」

「もうっ！ 先生の言うことは聞かなきゃダメなんだからね、ヒカル！」

「うるせーな！ いつも何かある度に説教しやがって！ あかりは俺の母さんか！」
「何ですってえ!？」

いがみ合う二人を微笑ましく想い、同時に湧いた悪戯心に口角を上げる。

「進藤」

「なんだよ、後藤！ お前まで俺を仲間外れにするのか！」

「お前、もしかして見たいの？」

「見たいって、何がだよ！」

服の裾を持ち、臍が見えるまで捲し上げる。

「進藤のエッチ」

「~~~~~っ!？」

顔を赤くさせ、脱兎の勢いでヒカルは保健室から出ていった。

クスクスと笑みを零し、ヒカルが開け放った仕切りから見える、鏡に映る姿は三つ。

一人は保健室の先生、もう一人は啞然としているあかり。そして、もう一人。

外人な母親の遺伝子を色濃く引き継いだ金髪は背中まで伸び、悪戯成功に輝く瞳は緑。

容姿に頓着しないが、せめて髪だけは女らしくと思い伸ばした、密かな自慢だった。

かつての師匠も長髪だったからか、自画自賛にはなるが結構気に入っていたり。

捲し上げた裾を下ろし、簡単に身嗜みを整え、呆れ顔の先生と向かい合う。

「さて、邪魔者は居なくなりました。それじゃあ、ちゃっちやと始めちゃってください」

「……あなた、若いのに良い性格してるわね」

「それほど」

「褒めてはないわ」

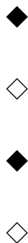
「……優しく、してね？」

「……ほんと、ある意味子供らしくないわ」

保健医は呆れ顔になるも、嘆息した後に診察を始める。

「……後藤さんって、大人なんだね」

あかりの言った言葉が、嫌に印象に残るのだった。



ヒカルとあかりと仲良くなるのに、それほど時間は掛からなかった。

両親も、初めてできた仲の良い友達に諸手を上げて喜んでくれたのは苦い思い出だ。

家に呼んだ時など頻繁に部屋にやって来ては構ってくるので、鬱陶しいことこの上な

い。

二度と家には呼ばないと宣言した時、両親の顔があまりにも悲愴だったので、以降も二人を呼んだりはしているが、出来れば勘弁してほしいというのが正直な話である。

「だあー！　また俺の負けかよ！」

教室に響くのは、ヒカルの声。

「へへっ。それじゃあ今日も荷物持ちよろしく、進藤？」

「くそっ、もう一回だヒカリ！　次こそは俺が勝つ！」

「ヒカルも懲りないんだから。ひーちゃんに敵うわけないのに」

「女のあかりは黙ってる！　これは俺とヒカリ、男同士の戦いなんだ！」

「女女って！　なんでヒカルは私ばかり仲間外れにするのよ！」

「……あの、一応あたしも女なんだけど」

「女はすっこんでろ！　あかりのくせに生意気なんだよ！」

「男ってなんでこんなに馬鹿なの！　ヒカルなんか特によ！」

「なんだと！」

「なによ！」

「……いいもん、別に構ってくれなくたって。別にいじけてなんかないもん」

肩甲骨程度だった髪は腰まで伸び、近所では美少女だと評判になっているのだが、枝毛一つない髪を指先でクルクルと弄り、口論する二人には目を向けず、机の上に目を向ける。

そこにあるのは、小さな木製の板。

四方に幾つもの線が伸び、その上に白黒の石が一見無造作に並んでいる。

「まあた囲碁かよ。囲碁なんて年寄りの遊びだつーの」

「ヒカルの奴、最近付き合ひ悪いよな。女とばつか遊んでるし」

「三角関係だぜ、三角関係。藤崎とは夫婦だから、後藤は愛人なんだよ」

後ろから聞こえる声に、振り返ればクラスの男子共が。

険を込めて振り返れば、罰が悪そうに顔を赤くしそそくさと散っていく。

普通ならば喧嘩を売ってきそうだが、生憎と女子の自分は男子よりも成長が早い。

過去に喧嘩を仲裁して以来、敵わないと判断されたようだ。

同時に男女の愛称が裏では定着することになるのだが、別段気にはしていなかった。

「で、放課後はどうする？　またあたしん家に集合すんの？」

出来れば勘弁願いたいのだが、これにはキチンとした訳がある。

理由の一つ、囲碁に必要な碁盤が自分の家にしかないのだ。

囲碁をするならそれこそマグネットタイプの簡素なものでも可能なのだが、脚付きの本格的なものがあるのは我が家にしかない。

強請った覚えはないのだが、昔から我儘など口にしなかった自分が碁盤を熱心に見ていたのを両親に発見され、誕生日にプレゼントしてくれたのだ。

値段については怖くて聞けなかったが、絶対に子供への贈り物としては高価過ぎだと思ふ。

ちなみに、ヒカルが囲碁に興味を持った切欠も、自宅に招待した際に見た碁盤だったりする。

最初は先程の男子同様、囲碁は年寄りの遊びだと馬鹿にしていたのだが、なら試しにと置き石を馬鹿みたいに置き、大差で勝利、悔しがるヒカルを鼻で笑ったらムキになり。以後、暇さえあればこうして再戦を挑んでくるくらいには、囲碁にのめり込んでいた。

自分達には内緒で、裏でコソコソと近所の囲碁教室に通っているのは公然の秘密だったり。

「へっへーん！ お前等、聞いて驚けよ！」

踏ん反り返るヒカルを、あかりが冷めた目で見る。

「今日は俺のじいちゃん家に集合だ！」

「えっ、なんでヒカルのおじいちゃんの家なの？」

「ふふん。それはだね、あかり君」

「何言ってるのよ、ヒカル……」

一方、自分はいええば、動悸が高鳴っているのが分かる。

自分の知る未来が変わるからと、そんな荒唐無稽な理由でこれまでアクションを取らずにいた。

既に、自分というイレギュラーがいる時点で、己の懸念に意味などない。

それでも、万が一があつてはと、急く気持ちに蓋をして、今日という日を待っていた。

「ヒカリのみみたいな本格的な碁盤！　じいちゃんが俺にくれるって約束してくれたんだ
！」

時は満ちた。

汗の滲む掌をギュツと握りしめ、早鐘を打つ心臓が心地よい。
やつとだ、待ちに待った時がようやくやく訪れたのだ。

姿は見えないかもしれない、声も聞こえないかもしれない。

それでも、かつて消えてしまった存在に、逢えるかもしれないのだから。



「だ、誰だよお前!？」

誰もいない虚空を見詰めたまま、ヒカルは叫んだ。

「ど、どうしたのヒカル？」

「何を騒いどるんじや。碁盤を貰ったのが嬉しいのは分かるが、限度というものが——」

「あかり、爺ちゃんも！ ほら、オバケだよ！ 髪の毛の長い、白い服着たオバケ！」

「オバケってお前、冗談を言うなら時間が違うじゃろう。こんな真つ昼間からオバケなんて……」

「嘘ならもつとマシな嘘をつこうよ。ね、ひーちゃん」

「……………」

「ひーちゃん？」

あかりの声は聞こえるが、それに構うだけの余裕がない。

放課後になり、ヒカルの公言通り、彼の祖父の家に訪れ、そこで目にした古い碁盤。

それを見た時、ヒカルは目に見えて落ち込んでいた。

そして、口にした——血みたいな汚れがついてるなんておつかないぜ、と。

直後だった、今のように訳の分からぬことを口にし出したのは。

「……………ははっ」

姿は見えない、声も聞こえない、ヒカルが言う血の跡など碁盤のどこにも見当たらない。
い。

だけど、分かる。

ヒカルが指差す先、何もある筈のない虚空に、確かに感じる事が出来る。

たった数年の間だけど、ずっと傍にいてくれた、自分にとつての碁の師匠。

嬬やかで、でも子供みたいに喜怒哀楽の激しい、ガマガエルが苦手な、最強の囲碁馬鹿。

いつの間にか消えてしまった、懐かしい空気に、気付けば目頭が熱くなる。

「……ひーちゃん、泣いてるの？」

瞳から溢れ出る涙を拭いてもせず、喜びを噛み締めるように。

懐かしい響きを、万感の想いを込め、吐き出す。

「何年待たせてんだよ、馬鹿野郎」

本名、後藤ヒカリ、性別は女。

家族構成、両親とあたし。

葉瀬小学校、六年女子。

渾名は男女、密かな自慢は長く伸ばした金髪。

——でも、後藤ヒカリには、自分とは別のもう一人の記憶が存在している。

本名、進藤ヒカル、性別は男。

家族構成、両親と俺。

職業、プロの囲碁棋士。

史上最年少の本因坊のタイトルホルダー。

「久しぶりだな——佐為」

これは、二つの記憶を持つ少女の物語。

神様の悪戯か、内に進藤ヒカルを宿した少女が紡ぐ、再開の序章。

その最初の物語は、こうして始まったのだった。

まる2

佐為と対局したいという願いは、しかし一向に叶う気配がなかった。

最初こそ、ヒカルが佐為の存在に慣れるのを待ち、頃合いを見て対戦を願いはした。しかし、打ってきたのはヒカルで、佐為ではない。

というのも、自分に勝つことに並々ならぬ拘りを見せるヒカルが、佐為に打たせる訳もなく。

ならばと、佐為に直接対局を申し込もうにも、そうなると色々と不備が出てしまう。

自分は佐為が見えないため、見える素振りを見せようものならば必ずボロが出る。

そうなれば、どうして見えない佐為のことを知っているのだという話になり。

自分でさえ説明のできない、ヒカルとは異なる、もう一人の進藤ヒカルの記憶を持ち、だから佐為のことも知っているのだと、そんな荒唐無稽な説明など出来る筈もない。

馬の鼻先に人參でもぶら下げられた気分だと、どうしようもないジレンマに苛まれていた。

「あれ、ヒカリ?」

何か上手いこと佐為と対局する方法はないか。

ヒカルと出会ったのは、じっとしているのは性に合わないと、街を彷徨っている時だった。

「どうしたんだよ、こんなところで」

「……別にあたしが何処にしようが関係ないだろ。そういう進藤こそ、どうしたんだよ」
「ぎくっ」

「……ぎくって口でいう奴、初めて見たぞ」

「う、うるせーな男女!」

「天誅」

「ぎゃああああああつ!?!」

ヘッドロックを決め、そんな自分達を通行人が微笑ましく見守る。

顔を青褪めさせタップするヒカルは、次の瞬間対照的な真っ赤な顔になった。

「お、おまつ……当たって……!?!」

「んー？ どこが当たってるってー？ お姉さん、言ってくれないと分からないなー」

「そ、それは……っ」

「進藤のエツチ」

「おお、お前がヘッドロックなんて決めるのが悪いんだろ!？」

「あー、そういうこと言うんだ。そっちがその気ならあたしにも考えがあるぞ」

「な、なんだよ……」

「藤崎にチクってやる」

「ちよ、あかりは関係ねーだろ!」

「あれ〜？ どうしてそんなに慌てるのかな〜？」

「う、うるせー!」

思春期男子ほど意味不明な思考回路は存在しないが、生憎ヒカルに限っては筒抜けだ。

渾名の通り、サバサバした気質故にこうして接触でもしない限りは異性と認識してもらえない自分とは違い、同年代の女子と比べ早熟なあかりの色香は、既に小学生の域を超えている。

やんちゃ坊主なヒカルの世話焼き女房な一面も合わさり、かなりの人気を誇っていた

り。

当時は全く気付きもしなかったが、性別が変わればこうも見る目が変わるものなのか。

とはいえ、ヒカルが慌てているのはあかりに好意を抱いているなんて可愛い理由ではなく、単純にあかり経緯で女子に話が拡散され、変態扱いされるのが嫌なだけなのだろう。

硬派を気取って女子を遠ざけ、しかし異性に嫌われるのを恐れる、それが思春期男子。これが若さかと、筒抜けなヒカルの思考回路を読み取り、息子を見るような眼差しを向ける。

「それで、いい加減話したらどうなんだよ。藤崎の話じゃ、お前、たまにこうしてふらつと何処かに出掛けてるそうじゃないか」

しかし、時折分らないこともあった。

佐為と出会い、紆余曲折を経て囲碁にのめり込んだもう一人の自分とは違い、ヒカルは佐為と出会う前から囲碁に嵌っている。

自分という異分子の影響なのだが、だからこそ記憶にないヒカルの行動が分からな

かった。

「……武者修行だよ」

「……は？」

「だから、武者修行！　囲碁教室の先生が、強くなるためには色んな人と打つ方が良いつて言ってたから！」

「へー、進藤って囲碁教室に通ってたんだー。碁なんて年寄りの遊びだとか言つて馬鹿にしてたのはどこの誰だったっけー？」

「わ、悪かったよ！　碁を馬鹿になんかして！」

「なーるー。だからそこいらの碁会所を渡り歩いてるつて訳」
「聞けよ人の話!？」

ヒカルを解放し、横目で見ると、見覚えのある碁会所が。

習慣とは恐ろしいもので、かつては何度も通った懐かしい場所に目を細める。

「だから、何度も言つてんだろ！　打つのは俺で、佐為は見てるだけだつて！　昨日だつて散々俺と打つたんだ！　俺の修行の邪魔はさせないからな！」

突然の声に何事かと振り返れば、ヒカルは何もない場所を見ながら独り言を。

——と思うのは事情を知らぬ者だけで、自分にはそれが佐為との会話だと分かっている。

自分はこのなにも佐為との対局を切望しているというのに、ヒカルは散々打っている。

「へー、ふーん。べつつにー？ 全然、これっぽっちも羨ましくはないんだけどねー？」

ヒートアップする一人口論に周囲からの視線が集まって来たので、落ち着けという名目の八つ当たりにとヒカルの後頭部に拳骨を叩きこんだ。

「んげっ!？」

「鎮まれ進藤。天下の往来で大声とは何事だ」

「だからって殴ることないだろ！」

「よーし。進藤にはあたしをエスコートする権利をやろう。光栄に思えよ」

「だから人の話聞けって！」

「席料はあたし持ちでいいぞ」

「喜んでエスコートさせて頂きます！」

清々しいまでの掌返し。

頭を下げるヒカルに苦笑し、佐為も同じ気持ちなのだろう。

同様に苦笑を漏らしているのがなんとなく分かって。

姿は見え、声さえも聞こえないけれど。

こうして佐為の存在を感じ取れることが、泣きたいほどに嬉しいと感じる自分があるのだった。



「——おしっ」

頬を叩き、気合を補充。

扉越しから聞こえてくる、聞き慣れた碁石と碁盤の音色。中にいるのは大人ばかり、何度も通ってはいるが未だに慣れることはない。

「早く入れよ、後が聞えてんだから」

「お前は男心つてものが全然分かってねー!」

「単純にビビってるだけだろ? 男心ならともかく、ヘタレの気持ちなんて分かるわけないだろ」

「うぐっ……!!」

「ほれ、はよ行け」

高ぶった気持ちに水を差すのは、半年ほど前に転校してきた友達——後藤ヒカリだ。転校続きで色んな場所に住んでいたそうだが、それ以上に興味が湧いたのは、その容姿。

髪や目の色は外人、なのに日本人顔というアンバランス、にも関わらず絶妙にマッチしている。

その上、掴み所のないサバサバした性格なのも合わさり、一躍学校一の有名人だ。名前がそっくりで、転校初日の事件も合わさり、なんの偶然か仲良くなつた。

しかし、月日が経っても、ヒカリのことは未だによく分らない。

ヒカリが女の子だという理由も勿論ある、最近のあかりなどはもつと意味不明だ。

——ヒカル、このおなごの言う通りです！　男は度胸、当たって砕けるです！

「砕けてどうするんだ！　女顔は黙ってろ！」

——ひ、酷い!?　人が気にしていることを!?　ヒカルの馬鹿！　阿保！　人でなし！

「なんだと！　そういうこと言うんなら、もう佐為とは碁は打たないからな！」

——な、なんですとお!?　鬼！　悪魔！　崇つてやる！　末代まで呪つてやるう！

「冗談でもそういうこと言うなよ!?　オバケのお前が言うと言やれになんねーぞ!」

「……もしもし、救急の方ですか？　目の前に何もなくてここで会話をしている精神異常者

が——」

「ヒカリい！　お前のそれもシャレにならねーからなあ！」

無理矢理携帯を閉じさせ、舌打ちするヒカリには取り合わない。

ついでに、最近の悩みの種である平安時代の碁打ちの幽霊——藤原佐為もスルーだ。

戦う前から既に疲労困憊になってしまったが、同時に緊張感もどこかに消えてしまつた。

狙ってやったのかとヒカリを見遣り、あり得ないと断じて扉を潜る。

「あら、男の子が二人？　アキラ君以外に君達みたいな子供が来るなんて珍しい」

受付の人なのだろう、女性の言葉にぶつと噴き出す。

今のヒカリの恰好は、上はパーカー、下はハーフパンツ。

長い金髪はキャスケット帽の中に納まっているので、なるほど確かに男子にしか見えない。

ギロリとヒカリが一瞥してくるも、すぐにシヨルダーバッグから取り出した財布を取りだす。

「お前って金持ちなのな」

「考えなしに浪費するお前とは違うってことだよ」

——ヒカリちゃんの言う通り。無駄な浪費は極力控えるべきです。

「そうか、だったらもう碁会所には通わなくていいな」

——必要経費というヤツですね！　さすがはヒカル！　私はあなたを誇りに思います！

佐為の相手をしている間に、ヒカリは千円札を受け付けの人に渡し、スタスタと店内へ。

勝手知ったる我が家のような気軽さに疑問に思いつつ、自分達のような子供が珍しいのだろう、好奇を宿した大人達の視線が次々に突き刺さってくるのが分かる。

そうして、ヒカリが足を止めたのは、自分達と同年代だろう少年の前だった。

「お、なんだ。子供居るじゃん」

「えっ……？」

「ちよ、ちよつと待って！ その、アキラ君は……」

受付の人が慌てて来るが、それには取り合わず自己紹介へ移る。

「俺は進藤、進藤ヒカル。小六だ」

「……後藤ヒカリ。歳は右に同じく」

「進藤君に、後藤君だね。僕は塔矢アキラ。君達と同じ小学六年生だよ」

ニコリと笑い、塔矢は手を差し出してくる。

一見真面目タイプと思いきや、中々に親しみやすい奴だと考えを改め、手を握り返す。次いで、塔矢はヒカリにも手を差し出すが、余所を向いているので気付いていない。肘で突くが一向にこちらには振り向くことはなかった。

「んじゃ、さっそく打とうぜ」

「でも……」

「ヒカリのことはほっときやいいよ。それよりも対局だ対局。せつかくの武者修行なんだからな」

「ねえ、進藤君だっけ？ 囲碁を始めてどれくらい経つのか？」

「うーん……春頃に始めたから、半年くらいかな？」

「は、半年って……だからアキラ君のことも……」

「ふふっ、別にいいですよ市河さん。僕も同い年の人と打てるのは大歓迎だし」
「アキラ君がそういうなら……」

塔矢の対面に座り、碁会所巡りの際に自分に課したルールを言い放つ。

「最初に言っとく。ルールは互先、手加減なしのガチンコバトルだ」

「え……でも、進藤君って碁を初めて半年なんでしょ？ だったら何個か置き石を——」

「俺、手加減されるの死ぬほど嫌いなんだ」

戸惑う塔矢には構わず、横目で見たのは、尚も明後日の方向を向くヒカリ。

忘れもしない、ヒカリの自宅で初めて打った対局。

完全初心者な自分が負けるのは仕方がない、今なら憤死レベルの置き石の数だったとしても。

しかし、ヒカリは今でも自分との対局では手を抜いている。

最初は碌にルールも理解していなかったから根拠はなかったが、囲碁教室に通い、沢山の達人と打つことで、本気の碁打ち特有の空気をヒカリが一度も纏ったことのないと理解してしまった。

思えば、これまでのヒカリとの対局全ては僅差での敗北、それも終盤まで打っていた。本音を言えば、声を大にして言いたい——手を抜くな、本気でやれと。

だが、ヒカリが本気で碁を打たないのは、自分にそれだけの実力がいないからで。

「指導碁禁止、手抜きも一切なしだ。塔矢。お前の全力、俺に見せてくれ」

「……分かったよ、進藤君」

握った結果は、自分が黒、塔矢が白。

コミは五目半。

——ヒカル、ヒカル。

——なんだよ、佐為。悪いけど話は対局の後にしてくれ。

——ヒカリというおなごは、あなたにとってどのような存在なのですか？

先程の失態を冒さぬよう、周りに聞こえないように意思疎通を行う中での、佐為の問いかけ。

そんなことかと碁盤へと意識を集中し、指先で挟んだ碁石を盤上へと放つ。

半年前、ヒカリに負けて以来、何度となく繰り返し、だいぶ様になった打ち筋で。

「ライブルだよ。絶対に追い抜いて、追い越してやるって誓ったな」

右上スミ小目。

初めての対局でヒカリが打った時と同じ場所へと、彼女の背中を追い掛けるように。パチツと強い意志の宿った一手を放った。



「……………負けました」

決着が着くのに、それほど時間は有さなかった。

項垂れ、力なく投了を宣言する進藤に、塔矢はしかし彼への評価を改めていた。

「……………進藤君、君って本当に碁を初めて半年なんだよね」

「……………そうだけど、それがどうかしたのか？」

以前対局した、子供名人戦の優勝者である同い年の彼に迫る棋力。

棋力だけ見ればまだまだ塔矢の敵ではないが、特筆すべきはその成長速度。

「凄いよ。たった半年でここまで打てるなんて」

「……慰めはいらねーぞ」

「慰めなんかじゃない。僕は色んな碁打ちを見てきたし、たくさんの打ち手の話を聞いてきたけど、半年でここまで上達した人はほんの一握りだけだ。師匠は誰なの？」

「師匠？ そんなの居ないけど」

「……じゃあ、身近にプロの人とかは？」

「通ってる囲碁教室の先生がそうだけど、他にも教えてる年寄り連中がいっぱいだからな。あんまり教えてもらってはないな」

嘘だと、動揺を必死になって隠す。

だが、進藤が嘘を付いている様子はない。

記憶に新しく最も印象に残っている倉田プロですら、そういった環境は必要だったのだ。

進藤の言葉が本当なら、彼は独学だけでたったの半年でこれだけ打てるというのか。

「あつ、でも強い奴とならよく打つぜ。犬コロみたいな奴だけ……」

「犬コロ？」

「い、いや、今のは忘れてくれ。もう一人はほら、そこにいるヒカリだよ」

その時初めて、ヒカリと名乗った彼と目が合った。

目深に被られた帽子の奥から覗く、神秘的な緑の瞳に、心臓がドキリと音を立てる。

「よし、検討しようぜ。色々と駄目だったところはあるけど、中でも俺は此処が——」

「進藤、タイム。あと、チエンジ」

「……チエンジ？」

「だから、交代だよ。こっからはあたしが打つから」

「はあ!？」

叫ぶ進藤を無理矢理退かし、腰掛けたヒカリを見る塔矢の目は懐疑的だ。

「……進藤君を貶めるつもりはないけど、此処から挽回なんて不可能だよ」

出会って僅かだが、苛烈な攻め手が目立つ進藤は中々に負けず嫌いなのが理解でき

る。

今回の対局、本来なら投了はもっと早かつただろう。

それでも諦めず、前の子供名人戦優勝者の彼と違い、こちらとの力量差に委縮することなく、必死に起死回生の手を探す、決して最後まで勝負を捨てなかつた、そんなヒカルの碁。

だからこそ、せつかくの気持ちのいい碁の余韻に水を差され、塔矢は珍しく気が立っていた。

「無理かどうかは、やってから決めればいいだろ」

瞬間——空気が一変した。

「っ!？」

重い、まるで海の底深くにいるような。

息が難しい、額に汗が浮かぶ、悲鳴を抑えるが手の震えは治まる気配がない。

重圧、気迫、全てが今この瞬間も増している。

一礼し、洗練された迷わない一手を盤上に放つ、目の前の彼から視線が離せない。はっはつと、長距離を走った後のように、呼吸が荒くなつていく。

——こんつ。

ヒカリの指先が碁笥でも打ち付けたのだろう、突然の物音にびくつと体が跳ね上がる。

だが、おかげで自分が緊張していることが否応なしに理解できた。

落ち着けと自分に言い聞かせ、掌に浮かんだ汗を拭う。

思えば、一体何を気負うことがあるというのだろう。

この勝負、既にこちらの勝利は確定しているではないか。

盤面は中盤を過ぎ、終盤へ差し掛かる頃だろうか。

各所の連携は途切れ、強引な攻め手が理由の死地が目立つ。

圧倒的に白が優勢、此処から挽回するなんてプロでも絶対に不可能だ。

「……お願ひします」

敗北はあり得ない、あるのは約束された勝利のみ。

にも拘らず、何時もなら重さを感じない碁石が、まるで鉛でも持っているみたいに重

い。

決定打となる一手を打ち終えた後、ほつと息をつく塔矢はふと、既視感を覚えた。自分は知っている、この空気を、この気迫を、この重圧を。

誰もが負け戦だと思う中、無謀にも勝負を挑む、目の前の少年から放たれるもの。それはかつて、無理を承知で一度だけ実現できた、忘れもしない一局。

「……ははっ……僕は、なにを……」

有り得ない、絶対にそんなこと。

——まるで、本気のお父さんみたいだなんて……。

塔矢の肉親であり、父として、最も尊敬する碁打ち。

数々のタイトルを保持し、その名は国内に治まらず、海外にも広く知れ渡る。

日本囲碁界の頂点に君臨する最強の棋士。

後藤ヒカリから、塔矢行洋と同じ高みを感じるなんて——。

まる3

「——届かなかった、か……」

終局。

同時に込み上げてくる悔しさと疲労感に、天井を仰ぎ、背凭れに寄り掛かった。キィと鳴る椅子の悲鳴に取り合わず、深く深呼吸。

吐き出した吐息からもなお漂う敗北感に、齒を力一杯に噛み締める。

「凄いじゃないか！」

「きゃっ」

突然の声に動揺し、漏れたのはらしくない可愛らしい悲鳴。

羞恥で顔に熱が集中するのを自覚し、声の主を探るために後ろを振り返り、

「あの塔矢アキラに半目差なんて！ いやはや、大したものだ！」

「最後の追い上げなんて殆ど理解できなかつたけど、本当に鬼気迫るものだったよ！」
「結局最後の方しか見れなかつたけど、いい碁だったのは分かる！ うん、良かった！」

目の前に広がるのは年寄り、爺さん、おっさん連中。

どれもこれもが懐かしい面子で、どうやら会話から察するに観戦は終盤からなのだろう。

仮に最初から見ていれば、今の称賛が動揺と畏怖へと変わっていたことは容易に想像できる。

とある意図があつての一局だったが、軽率な行動だったと反省した。

「わっ」

「若先生相手にここまでやるとはな！ 自慢していいぞ、坊主！」

乱暴に頭を撫でられ、ズレたキャスケット帽を抑えながら見上げれば、件の人物の姿が。

「げっ、北島!？」

「北島さんだ馬鹿者！ 目上の相手呼び捨てとは何事か！」

「だ、だつて……」

「ふんつ、若先生を見習わんか。そんな礼儀知らずだから、それが勝敗に結びついたんだ」

今いる碁会所——《囲碁サロン》は塔矢行洋が経営しており、北島はその常連客のオヤジ。

塔矢を《若先生》と呼ぶ様子からも相当の入れ込みようだが、対照的に自分には何時まで経っても呼び捨て、本因坊のタイトルを取つてからもそのスタンスは変わらない。徹底抗戦の構えを取ろうとするが、グウの根も出ず、湧いた反骨心も萎えてしまう。

「……あたしの負け、か」

差は半目、結果は白——塔矢の勝ちだ。

ヒカルと塔矢の互先で始まり、投了した勝負を自分が引き継いだ形になる変則した対局。

正直、並みの相手なら絶対に勝てるという確信があった。

それでも、相手はアマチュアで、小学六年生の子供で——だけど、塔矢アキラなんだ。棋力が不明な自分相手に、しかし塔矢は始終手を緩めず、情け容赦など欠片もなかった。

だが、それでいい。

自分の憧れが佐為なら、塔矢はライバルだ。

佐為に匹敵する囲碁馬鹿で、度を超えた負けず嫌いな、頭でっかちな生涯の好敵手。例え今はまだ未熟な子供だったとしても、手を抜くなんてできなかった。

その上で思う、やっぱり塔矢は強い——だから、負けて本気で悔しいって。

「そっか……あたし、負けちゃったんだ……っ」

悔しくて、悔しくて、別の狙いがあったの対局だったとしても。

勝ちたかった、負けたくなかった——他の誰でもない、相手が塔矢だったから。ポタッと、膝の上で握り締めた拳に涙が零れ、慌てて拭おうとして。

「——ヒカリっ！」

「……進藤？」

「…………お前、なんで…………こんな…………」

咄嗟に手を掴まれ、そちらを向けばヒカルの姿が。

切迫した様子だが、何かを言おうと開いた口は中途半端に閉じてしまう。

突然の剣幕に押し黙っていると、ガタリと激しい音の後、もう片方の腕が掴まれる。

「い、後藤君！」

掴んだ腕の正体は、塔矢で。

両手が塞がったせい、北島のせいでズレていたキャスケット帽が完全に頭から脱げ落ちる。

視界が金で溢れ、腰まで伸びた髪が背中をくすぐる。

瞬間、水を打ったように碁会所が静まり返った。

「……………女、の子…………？」

その言葉にムツとする。

「なんだよ、女が碁を打っちゃいけないのかよ」

返答の言葉はなく、なおも室内を支配するのは静寂。

埒が明かないと、進藤と塔矢の腕を振り払い、碁会所を後にする。

泣いている顔を見られたことが恥ずかしいという気持ちも多分にある。

だから、ヒカルには悪いが、今回の席料は自分持ちなのだから、それで勘弁願いたい。

「ひ、ヒカリ！ 待ってって！」

「待たない。進藤は残ればいいだろ、武者修行中なんだし」

「いや、でも……だってヒカリ、泣いて——」

「後藤さん！」

出口に掛けた手が止まり、肩越しに振り返る。

先程のヒカル同様、必死に何かを口にしようとして、それが叶わないような。

呆れ顔で嘆息を零し、扉を開けようとした時、塔矢はようやく口火を切った。

「君は碁を初めてどのくらいになるの？」

懐かしいその問いに、振り返ったまま、表情を笑みに変える。

零れる涙を拭い、しゃんと気持ちを持ち上げ、不敵な笑みで塔矢を見据えて。
冗談事を、しかしあの時は紛れもない真実だった、その言葉を。

「千年」

虚を突かれた塔矢の顔に、悪戯成功と相好を崩し、今度こそ碁会所を後にした。



——ヒカリと打たせてください！

また始まったと、ヒカルはゲンナリと息を吐いた。

時は体育、場所は運動場、本日も晴天なり。

開始早々にクラスの男子共の総攻撃に合い、呆気なくアウトになったヒカルのいるのは場外。

だが、ムシムシと熱く降り注ぐ陽光よりもなお鬱陶しいのは、自分にしか見えない幽霊だ。

——お願いします！ ヒカリと！ 彼女と打たせて欲しいのです！ ヒカル！
ねえってば！

「何度頼まれても、俺の答えは変わらないぜ」

——そこをなんとか！

あくまでも視線は前を向いたまま、意識を横へと向ける。

「前から言ってるだろ。他の奴ならともかく、ヒカリとだけは駄目だつて」

——何度もという訳ではありません！ 一局だけ！ たった一局でいいですから！

「……その一局が問題なんだよ」

視線の先、コートの中を輝く金髪が踊るように舞う。

男子の投げたボールを受け止め、そのまま全力投球。

自分の知る女子に良くあるナヨナヨしたフォームではない、立ち塞がる障害全てを粉碎せんばかりの剛速球は当然のように相手は捕球できず、それどころか零れたボールが近くの味方に当たる。

沸き起こる歓声、二人抜きという偉業を成し得たのは異国の容姿をした一人の少女だった。

「……さすが男女。生まれる性別間違ってるぜ」

塔矢との一局の後、涙を流すヒカリには掛ける言葉が見つからなかった。

別に女の涙を見るのが初めてという訳ではない。

腐れ縁なあかりとはよく口論になるし、その結果泣かせてしまうなんてことは何度もある。

だけど、初めて見たんだ。

真剣に、まるで身を削るような、そして負けて、瞳から流れる悔し涙。

自分が知っている真剣が馬鹿みたいに思えてしまう、本当の意味での真剣勝負を見た

のは。

「くそっ」

凄いと思った、それ以上に悔しかった。

ヒカリの碁への姿勢が、そんな彼女の全力を相手に出来たのが自分ではないことが、
同じ年なのに、ヒカリの全力を引き出した塔矢が羨ましくて仕方がなかった。

だけど、同時に心がどうしようもなく震えもした。

自分は間違っていないなかった、囲碁を始めて良かったって。

目標とするヒカリの途方もない強さに、ヒカルは歓喜したのに。

「……佐為がやるっていつても、実際に打つのは俺なんだ。佐為が打てば、それが俺の
力つてことになる。そうなったら、俺はもう進藤ヒカルとしてヒカリと打てなくなる
てことなんだぞ」

———そ、それは……。

「仮に説明したとして、誰が信じるっていうんだよ。今打ってるのは俺じゃない、佐為
っていう幽霊が打ってるんだって。そんな風に説明して、ヒカリが納得すると思ってるの

かよ」

——……すみません。

「……いや、俺も言い過ぎた」

別に意地悪している訳じゃない。

未だに底知れない棋力を持つ佐為の方が、自分が打つよりもずっとヒカリのためになる。

だけど、嫌なんだ。

ヒカリが自分を見てくれなくなることが、佐為だけを見ることが。

ヒカルにとって、ヒカリは碁を始める切欠であり、絶対に勝ちたい、そう思える相手だから。

「はあ……俺だって分からずに碁を打つ方法でもあれば別なただけだな」

——そんな都合のいい方法なんてある訳ありませんよ。

「だよなあ……」

「——あるよ」

「わあ!?!」

突然の声に、驚き飛び退いてしまう。

「き、急に声かけんよ、あかり!？」

「急じゃないよ、さつきからずつと声掛けてたもん。無視するヒカルが悪いんでしょ」

そう言つて、あかりはプクリと頬を膨らませる。

佐為に続いて面倒な奴が現れたと、そんなことを思つてしまうヒカルだった。

「そ、そんなことよりさ」

「そんなこと?」

「いや、だから悪かったつて。その、俺だつて分からずに碁を打つ方法つて……」

暫く睨むあかりだったが、相変わらず頬を膨らませたまま明後日の方向を向く。

「………ネット碁」

ぼそつと呟かれた聞き慣れない単語に、首を傾げる。

「だから、ネット碁だよ。インターネットを使って、世界中の人と打てるの。私も最近始めたんだけど、色んな強さの人がいて面白いから、その……ヒカルもどうかかなぁって」

「……ネット碁かぁ。でも、ヒカリがやってないんじゃないじゃ意味ないだろ」

「ひーちゃんもやってるよ、ネット碁」

「……はい？」

「だって、私にネット碁のこと教えてくれたの、ひーちゃんだもん」

絶句、ただただ絶句である。

「お、おまえなあー！」

「きやあ!？」

堪らず詰め寄ると、あかりは悲鳴を出した。

「なんでそういう大事なこと黙ってたんだよ！　ズルいぞお前らだけ！　俺に内緒でそん

なことをやってたのかよ！」

「ひ、ヒカルだって私に内緒で囲碁教室通ってるでしょ！　人のこと言えないじゃない！」

「な、なんでお前も知ってたんだよ！」

「そのことは別にいいでしょ！」

「よくねえよ！　大体あたりは一々煩い——」

——ヒカル！　ヒカル！

佐為の制止の声に、しかし憤りが収まらない。

——彼女にネット碁なるものをご教授願いまししょう！　そうしまししょう！

その言葉にハツとし、ぐつと言葉を堪える。

突然の沈黙に身構えるあかりの肩に、勢いよく両手を置き、ぐつと顔を近付けた。

「あかり！」

「ちよ、ヒカル!?　だ、駄目だよ、その……今は、授業中だし……」

何故か真つ赤になるあかりに構わず、思いの丈を口にする。

「俺にネット碁を教えてくれ！」

取り敢えず了承は貰えたのだが、何故か思い切りピンタされた。放課後まで口も聞いてくれなかったのが地味に堪えたヒカルだった。



そして、時は過ぎ、週末。

待望の休みへ突入し、ヒカルも例に漏れず、外へと飛び出す。

——凄いいい！ こんなにたくさんの書物があるなんて！

「……頭痛が痛い」

ハシヤグ佐為とは対照的に、ヒカルはウンザリしたように呟く。

目の前に広がるのは本、本、本——。

これが全て漫画なら諸手を挙げて喜ぶところだが、生憎近所の図書館に漫画は置いていない。

碁を始める前は専らアウトドア派、今でも難しい本など見るだけで駄目だ。

しかし、今回図書館を訪れたのは本を読むことが目的ではない。

——ほら、ヒカルあれ！ パソコンがあんなにたくさん！ 早く打ちましよう！

「そんな急かすなって」

——そももいきません！ 今この瞬間もヒカリがいるのかもしれないんですよ！

ヒカルがのんびりしているうちにヒカリがどこかへ行ってしまったらどうするのですか！

「はいはい、分かりましたよつと……」

受付で手続きを踏み、これでパソコンの借用は完了である。

あの体育の授業の後、久方ぶりに訪れたあかりの家に、彼女の母が持っているパソコ

ンを使ってネット碁のやり方を教えてもらったのだ。

ヒカリには絶対に内緒だという口止めは勿論忘れてはいない。

口止めと授業料ということで、この後買物に付き合わされるのは完全な誤算だったが。

「s、a、i……よし、これで準備完了だ」

——よろしいのですか？ 私の名前を明かしてしまっても。

「ハンドルネームだからな。そもそも、お前のことは俺以外には見えないし知らないんだ。別に問題ないだろ」

ログイン画面でハンドルネーム、《サイ》——《s a i》と打ち込み、しかし対局は始めない。

待機画面に映るログインリストを食い入るように見つめ、目的の人物を探す。

「——見つけた」

あかりからおおよその時間帯を聞いていたが、狙い通りだ。

即座に対戦申し込み、程なくして了承が得られ、ヒカルは後ろにいる佐為に振り返り、

「

開いた口を、すぐに閉ざす。

アレだけはしゃいでいた、子供のような佐為はそこにはいない。

目を瞑り、微動だにせずに静かに佇むその立ち姿。

塔矢との対局に乱入してきたヒカリの時も感じた、覚悟の決めた者の空気が満ちていた。

——神に、そしてヒカルに。私は心から感謝します。

怖いくらいの真剣な眼差し。

ゴクリと息を呑み、パソコンに向き直ったヒカルは、マウスを手に集中する。

自宅の部屋で打つ代打ちと何ら変わらない、だけどもミスは絶対に許されない。

物音一つ立てることすら躊躇われる、そんな雰囲気の中、ヒカルは願った。

画面の先にいる彼女に、切に願う。

佐為の全力に伝えてくれ、もう一度俺にお前の本気を見せてくれと。

「いくぞ、佐為」

——ええ、ヒカル。

ハンドルネーム、《アイズ》——《a i s》こと後藤ヒカリ。

コミは五目半の互先、こちらが黒。

その第一手、右上スミ小目へと、ヒカルはマウスを動かすのだった。

まる4

気付けば、ヒカルは真つ暗な闇の中にいた。

自分は図書館にいた筈では、そう思った時だ。

ボウっと、目の前に碁盤が浮かび、次いで碁石と碁笥も。

理解が追い付かないヒカルは、遅れて現れた存在に息を呑んだ。

白い衣に黒の烏帽子、座した床に広がる黒髪は闇の中でなお輝いている。

盤上を睨む眼差しが閉じられ、直後に踊る指先から黒の一手が放たれた。

「佐為……」

碁を初めて半年のヒカルでも分かる、それはこれ以上ないほどの最善の一手。

普段こそ指導碁ばかりだが、改めて佐為の強さを認識した、次の瞬間、

「……………え」

佐為の対面、突如浮かんだ指先から放たれる白の一手。

間違はなく致命的だった佐為の一手を躲し、そこから更なる可能性を伺わせる。熟考などない、ノータイムの反撃。

心なしか表情を歪める佐為は、相手の可能性を潰そうと黒石を掴んだ。

「すげえ……」

盤上という小さな世界に形成される、黒と白のコントラスト。

僅かな綻びさえない、少なくともヒカルにはそう見える完成された世界。

だが、違うんだ、佐為にも、そして相手にとつても。

広い、まるで天から地上を見下ろす神様のように、遥かなる高みからの応酬。

矮小なヒカルには見えない、ずっと先を見通す様な、可能性の潰し合い。

これが強者の戦い、これが本当の碁、自分が目指す頂の光景。

気付けばぎゅっと握られた拳は畏怖か、それとも武者震いか。

「……あれ？」

互角に見えた盤上の戦いが、一方に傾く。

毎日のように佐為と打ち、他の碁会所で武者修行をするヒカルだからこそ気付いていた。

佐為は強いが、打ち筋がどこか古臭いのだ。

碁には定石と呼ばれる、研究の末に導き出された最善手が存在する。

本来であるなら不要な一手を、現代の定石を知らないが故に、佐為は打たざるを得ないのだ。

今まではその圧倒的棋力で誤魔化せていた佐為の弱点に、綻びが生じる。

あるいはもつと前からか、ヒカルの目には黒が劣勢に陥っているように見えた。

「——あつ」

だが、それも次の白の一手を見るまでだった。

左方の鬩ぎ合いから一転、全く関係のない場所への一手。

ヒカルでも分かる、明らかな悪手だ。

佐為からもその戸惑いは伝わってきて、暫しの逡巡の後、左方の戦いへ一手を投じていく。

そのまま戦いは終盤へ。

一度は劣勢だった黒はその差を縮め、あと一步というところまで追い詰めていた。この調子で行けば逆転も十分に視野に入る、そう思った時――

――

空気が、音を立てて凍り付いた。

息を呑む佐為に戸惑うが、盤上には何ら変化はないように思える。

しかしだ、心がざわつく。

皮膚の下に虫でも這いずるみたいに、得体の知れぬ悪寒が全身を駆け巡るのだ。

「な、んで……」

やがて、その違和感は決定的なものに。

堅実な打ち筋から一転、佐為は標的に喰らい付く獣のように強引に敵陣へと攻め込んでいく。

何が佐為をそこまで焦らせるのか。

集中し過ぎたからか、目を休ませようと瞳を閉じ、改めて盤上を見渡す。

「……………うそ、だろ」

先程の白の悪手が、気付けば盤上を支配していた。

有り得ない事態に、皮膚が泡立つ。

こんな一手、絶対に有り得る訳がない。

それこそ、佐為の思考や打ち筋を全て理解でもしない限りは絶対に不可能な、そんな最善にして最高の位置に、燦然と輝く白の基石が鎮座していた。

「これが、あいつの全力」

一体、彼女にはどんな光景が見えているのか。

ヒカルは見誤っていた。

前回の対局、塔矢との戦いで見せた怒濤の追い上げ。アレが彼女の持てる全ての力だと、そう思っていた。

「これが、本当のヒカリの碁だっというのか」

浮かんだ指が白を掴んだ直後、今まで見えなかった姿が露わになっていく。

自らが発光しているみたいに輝く金髪に、佐為を真つすぐに見据える緑の瞳。

だけど、これはどういふことなのだろう。

必死に挽回の手を模索しているのだろう、盤面に視線を落とし続ける佐為は気付いていない。

だから、ヒカリを見ているのはただ一人、傍観者であるヒカルだけだったから。

「……また、泣いてる」

ヒカリは、泣いていた。

盤面ではなく、佐為を見据えて、静かに涙を流していた。

「」

その声は、今にも消えてしまいそうなほど、儚くて。

たった一言、それ以降の言葉はなく。

あまりにも小さなヒカリの言葉を、ヒカルは拾い取ることが出来なかった。けれど、同時に想うのだ。

部外者の自分に、ヒカリと佐為の語らいを聞く資格などないんだと。

「……ヒカリ」

沸き起こる疎外感に、ヒカルが呟いた声は反響することなく消えていく。強くなりたいたい。

ヒカリに振り向いて貰えるくらい、塔矢にも、佐為にだって負けないくらい、強く。そして、終わりは静かに訪れる。

天を仰ぎ、瞳を閉じた佐為の口から、その言葉は零れていく。

「……負けました」

黒、《sai》。

白、《ais》。

勝敗、黒の投了。

仮想空間で実現した勝負は、後藤ヒカリへ軍配が上がったのだった。



シトシトと降り積もる雪が、ヒカルの頭上へ。

あかりとの約束を果たすべく、約束の場所へと歩くヒカルに、佐為は追従してくる。

「……佐為」

振り返ったヒカルの言葉には、力がなかった。

短い付き合いだが、佐為が碁に並々ならぬ情熱を注いでいるのは分かる。

敗者に掛ける言葉はないというが、今回の相手は強者とはいえ自分と同一年の少女。

大人の佐為が、子供のヒカリに負ける。

幾度も挑み、その度に連敗記録を増産するヒカルだが、未だに敗北に慣れることはな

かった。

だから、なおのこと、どんな言葉を掛ければいいのか。

「あの、さ……」

立ち止まり、ずっと俯いていた佐為を見上げる。

「その、負けて悔しいのは分かるけど、でもさ——」

——ほんつとうに！ ヒカりは凄い！

「……………へ？」

顔を上げた佐為に、悲壮感は微塵だつてありはしない。

キラツキラと輝く瞳に宿るのは、純粹無垢な喜色に染まっていた。

——火のような苛烈な攻め！ 山のような堅牢な守り！ こちらの隙間へと潜り込む風のような打ち筋！ あの年であれだけ落ち着いて打てることでも驚きなのに！
凄い凄い！ すごーい！

諸手を挙げ、ヒカルの周りをクルクルピョンピョンと飛び跳ねる、そんな佐為の姿に。心配した自分が馬鹿みたいだと思っただけけれど、同時に思い知らされた。佐為の碁を愛する姿勢。

勝敗さえも超越した、そんな佐為が敗北程度でめげる訳がないのだと。

——ヒカリと打てて良かった！ 先程の一局だけでも、現世に留まった甲斐がありません！

苦笑を浮かべ、ヒカルは改めて佐為へ問い掛ける。

「そっか。なら、満足したか？」

——いえ、全く！

ピキリと、ヒカルの笑顔が凝結する。メラメラと、佐為の瞳が燃え上がる。

——黒を持って敗北したのはあれが初めて！ 確かにヒカリとの対局は心躍りしましたが、私にも意地があります！ 次こそは絶対に勝つ！ 待っていなさい、後藤ヒカリ！

「ちよ、ちよつと待て!? 話が違うだろ！ 一局で満足するんじゃないのか!」

——寧ろ俄然やる気が出てきました！ という訳でヒカル！ 次もお願ひします！

「ふざけんな！ 大体、最初にヒカリに勝つのは俺なんだから！ 佐為はその後!」

——そ、そんな殺生な!? 一体何年待てばいいのですか!?

「こんにやろう！ ヒカリばつか追いかけて、いつか俺に足元掬われても知らないぞ!」

——ヒカルに? ……ふつ。

「鼻で笑いやがったな!」

——弟子が師匠に勝つなど千年早いのです!

「いつから犬コロの弟子になったんだよ!」

——誰が犬コロですって!

「教えてやるよ! 師匠つてのは必ず弟子に追い抜かれる運命なんだつてことをな!」

——ヒカルのくせに生意気です!

「お前にだけは言われたくねえ!」

気付けば、罵り合いに。

仲の良いのか、悪いのか。

それでも、弟子ヒカルと師匠佐為、共に目指す背中と同じだから。

「ヒカリに勝つのは俺だ!」

——いえ、私が勝ちます!

「俺が先だ!」

——私の方が先です!

「俺だ!」

——私です!

「俺!」

——私!

ヒカリを巡つての論争は、あかりとの待ち合わせ場所に着くまで続き。

そのことであかりの機嫌がずっと低空飛行を続けることになるのは、また別の話。碁への理解は深くても、女心に関しては依然乏しいヒカルだった。



水気を帯びた髪を乾かすことなく、ヒカリはベッドに倒れ込んだ。

風呂上がりの火照った頬に、外気に当たり冷たくなつたタオルが心地よい。

朱が差した瑞々しい肢体を惜し気もなく投げ出し、ポーつと天井を見上げる。

「……………」

待ち望んだ一局が叶つた。

自分への対局に執着するヒカルがいる以上、今のままでは佐為と打つことは不可能。だから、攻め手を変えてみることにした。

塔矢との一局でこちらへの興味を掻き立て、佐為に自分との対局をヒカルにせがませる。

当然、ヒカルが面と向かつて佐為を打たせることはない。

そこで、あかりの登場だ。

ヒカルが碁ばかりに構うからだろう、興味を持ったあかりにネット碁を勧めてみる。そこからヒカルへネット碁の話が伝われば、絶対に自分に挑戦してくるはず。そして今日、念願の佐為との一局が実現した。

「……………」

「……」

だけど……。体を起こし、部屋の中央に鎮座している碁盤に、石を並べていく。

心躍る、待ち望んだ佐為との一局。

しかし、終わってから心へと降り積もるのは、どうしようもない違和感だった。

「……………」

「……」

佐為は強かった。現代の定石を知らず、更には佐為の打ち筋はこちらには筒抜け。

事実、序盤から最後まで、自分は主導権を握り続けていた。

今回の一局、圧倒的にこちら側に有利な戦いだっただけに。

それでも、終盤の追い上げには危機感を持たざるを得なかった。

結果だけ見れば中押し勝ちだったが、佐為のこれからの成長を知る身としては、この程度の差、うかうかしていればあつと言う間に縮まってしまうことだろう。

「……違う」

だけど、同時に思ってしまうのだ。

佐為は佐為だけど、佐為じゃない。

自分の知る佐為と、ヒカルに憑りついた佐為は、同じ佐為でも違うんだって。

ヒカルを通して現代の碁を学び、近いうちにかつての高みへと上り詰めるだろう。

しかし、それは自分の知っている佐為と同じかと聞かれれば、違うと言わざるを得ない。

既に歴史は、自分の時とは異なる道筋を辿っている。

「……やっぱり、違うよ」

ヒカルはこの時点で、かなりの実力を有していた。

自分が本格的に碁にのめり込んだのが中学生に入ってから。

だが、打倒ヒカルに燃えるヒカルは、既に碁の世界にどっぷりと浸かり切っている。院生試験は難しいだろうが、三谷と互先でいい勝負が出来る程度の棋力は持ち合わせていた。

この調子なら、中学に入学する頃には院生試験も突破できるだろう。

そして、そんなヒカルに触発され、佐為もまた――。

「……も、……も……ここだって……全然、違う……」

成長という未来は、可能性という幾筋もの道を形作っているものだ。

心のどこかでは、こうなるんじゃないかって思ってた。

「こんなの、あたしの知っている佐為じゃない……」

自分という異物の存在が原因で、佐為は正史とは違う道筋を辿っている。

同じ佐為でも、同じ高みへと上り詰めたとしても、それは自分の知っている佐為じゃない。

今日の一局で、今まで目を背けていた可能性が、確信へと変わってしまった。佐為は、自分の知っている佐為じゃない——そんな当たり前のことに。

「……ははっ」

気付けば、視界が滲んでいた。

手の甲で拭い、それでも流れる涙を何度も、何度も拭う。

進藤ヒカルの記憶を持っていても、12年間後藤ヒカリとして歩んだ、二人の記憶を有する体。

馬鹿みたいに泣き虫な自分が嫌になる。

勝手な期待を佐為に押し付け、勝手に失望する自分が、心の底から卑しいと感じる。

こんなの、佐為に失礼じゃないか。

純粹に碁を楽しみ、自分との対局を切望してくれたのに、自分は醜い下心ばかりで。

「あたし、最低だ……」

涙で濡れた盤上を、衝動のままに荒らす。

自分の心を現すかのように、黒と白が乱雑に散らばった盤上に伏せ、涙を必死に押し殺す。

だけど、どれだけ我慢しても、涙は止まってはくれなくて。

佐為との対局中みたいに、流れ落ちる悲しみの涙が、ポタリと、何時までも。

「最低の、大馬鹿野郎だよ……」

きつとこれは、神様が自分に与えた罰なのだろう。

本当のヒカリを知る者が誰もいない、過去の世界で、一人孤独に生きる。

佐為と一緒に、遥かなる高みを目指すヒカルを、傍観することしか出来ず。

筒井や三谷、和谷、伊角、他にもたくさん――。

そして、塔矢だって、神の一手を目指すヒカルと佐為を追い掛けるんだ。

誰にも理解されることなく、一人虚しく、碁を打つことしかできない、それが罰なんだと。

「佐為……っ」

返事は、返ってはこない。

かつていた、鬱陶しいくらいに心配性でお節介な、自分だけの幽霊は、もういない。自分の我儘で、神の一手を極めることなく、志半ばで現世を去っていったのだから。ヒカリは今、独りぼっちだった――。

まる5

燃え尽き症候群である。

「……はあ」

人気がない公園で、ヒカリは一人ポツンとブランコに乗っていた。

ゲームに漫画、スポーツにアニメ、女の子らしくお菓子を作ってみたい。

色々と試しては見たが、ふとした瞬間に脳内で棋譜を並べてしまう、重度の囲碁脳。

禁断症状のように部屋の碁盤へと手が伸びるが、それではいけないとこうして外に出てみた。

「……暇ってどうやって潰すんだっけ」

口にしてみて、あまりにも間拔けな発言に苦笑してしまう。

進藤ヒカルの記憶を思い出し、佐為と対局するという目標をやつとの思いで達成し

て。

その結果得たものが、佐為が佐為じゃないという事実と身勝手な自分の矮小さ。

後藤ヒカリとして12年間生きてきたからか、ただの泣き虫な女の子が取ったのは現実逃避という、あまりにも情けないものだった。

碁を打てば嫌なことを思い出す、だから他のことをして紛らわせようと。

結論して、ヒカリという少女は碁なしでは生きていけない人種なのだと再認識しただけ。

「さすがにそれは色々とアウトだろ。あたしは今、小学生なんだぞ。もうすぐ中学生になるんだぞ。青春真っ盛りなんだぞ。それなのに趣味特技が碁で他にやることがないって、それは女として……あ、ヤバい、前科がいるわ」

男勝りで負けん気の強い、趣味特技が碁の女の子。

該当する人物が一人いることに乾いた笑みが零れてしまう。

「奈瀬……お前って実は結構残念な奴だったんだな」

もし会うことがあれば、普段は碁以外で何しているか聞いてみよう。返答が帰ってこなければ、一緒に傷の舐め合いでもしてみようかな。なんて下らないことを考えている時だった。

「——あの」

予想外の声に、弾かれたように顔を向ける。

「……良かった。人違いだったらどうしようかって思ってた……」

「……塔矢？」

「久しぶりだね、後藤さん」

安堵を顔に浮かべ、ホッと息を着いた塔矢は、そのまま隣のブランコへと腰掛けた。横目で伺ってみれば、額には汗が浮かび、息も心なしか上がっている。

「もしかしくなくても、あたしのこと探してたとか？」

「そのつもりだったんだけど、後藤さんが帽子を被っていることを思い出して」

「……別に好きで被ってる訳じゃないぞ。この髪だと色々が目立つだろ」

「……その、この前はゴメン。てつきり男の子だと思って……」

「別にいいよ。クラスじゃ男女つて言われてるし、紛らわしい恰好してるあたしも悪いんだから」

「……本当にゴメン」

どうしよう、鳥肌が立ってきた。

記憶にある塔矢はガミガミと何かにつけてはこちらの言動に突っかかってくる口煩い奴だっただけに、オドオドしながら様子を伺って来る今の彼は正直言つて気持ち悪い。

囲碁サロンで会つた時もだが、塔矢と仲良く握手とか絶対に無理だ。

「後藤さん——君に会いたかった」

だから、真剣な眼差しでそう切り出された時。

ドキッと胸が鳴つたのは、自分が後藤ヒカリでもあるからなのだろう。

「いきなりで悪いけど、もう一度僕と打ってほしい。今度は前回のような変則的な対局じゃない。互先で。進藤君の言葉を借りるなら、指導碁も手抜きも禁止のガチンコバトルでだ」

同時に、塔矢は変わっていないと分かって安堵する。

ヒカルに佐為という偶像を重ね、愚直にそれを追い求めてきたその精神。一歩間違えたらストーカーだなどか思ってしまうのは、自分が女だからか。

「……悪い、今はそういう気分じゃないんだ」

しかし、残念ながら塔矢の気持ちには答えられない。

「理由はっ……ゴメン、不躰だったね」

「ははっ、塔矢は何でも気にし過ぎなんだよ」

「……ゴメン」

「ごめん禁止。次言ったらもう打ってやらないからな」

「そ、それは困る!？」

「ぷっ……あはははははっ！」

冗談の通じない、そのクソ真面目な塔矢の対応に。

悲しみでも悔しさでもない、腹を抱え笑う自分の瞳から涙が零れる。

赤面する塔矢は力なくブランコに座り込み、恥かしそうに項垂れた。

「……そう言えば、あたしのせいであの時の碁、検討が出来ず仕舞いだったな」

本音を言えば、今は碁に触れたくはない。

弱い自分には、もう少しの間だけ、ただの女の子である後藤ヒカリの時間が必要だった。

だけど、こうして塔矢と話すことで、気持ちが少しだけ軽くなったことに気付いて。ブランコから立ち上がり、塔矢の正面に躍り出る。

「この前の検討ならいいよ。その代わりに、席料は塔矢持ちだからな」

塔矢の頑張りにも、報いるために。

突然の提案に、興奮を隠すことなく塔矢は立ち上がった。

「あ、ありがとう後藤さん！」

「——ヒカリ」

そんな塔矢に背を向け、肩越しに振り返りながら。

「ヒカリって呼んで。あたしだけ呼び捨てじゃ不公平だしね」

これで貸し借りなし、自分達は対等な存在。

かつてのライバルとの懐かしい距離感に、ヒカリは心からの笑みを零すのだった。



「何度同じことを言えば分かる！」

「お前だってなんべん同じこと言ったと思ってるんだ！」

場所は移り、此処は囲碁サロン。

経営者の親類という特典なのか、今後からも塔矢がいる場合に限り席料なしで打つてもいいという、小学生故に懐事情の厳しい身としてはあまりに魅力的な提案に即了承。

自分のことを覚えてくれていたのか、入店してすぐに集まる人ばかり。

そのまま和氣藹々と進む筈だった検討は、欠いていたもう一人の存在の乱入によって殴り合い秒読み開始の殺伐としたものへと変貌を遂げてしまった。

「この一手は明らかな失着だ！ 深追いして大損をしたことはもう忘れたのか！」

「結果的には大損だったけど分の悪い賭けじゃなかっただろうが！」

「君の実力ではまだ早いと言っているんだ！ 普通の人よりも早熟というだけで天狗になったつもりか！ そんなだから僕に大差を着けられるんだ！」

「この一手にはヒヤツとしたって言ったの忘れたとは言わせねえぞ！ 天狗になる？ 碁を初めて半年の俺にヒヤツとするレベルで偉そうなことをいうな！」

「事実を言つて何が悪い！」

「そんな風に熱くなるから何度も見落とすんだよ！ 俺の指摘になるほどって感心した

のはどこのどいつだ！ 格下って見下してるからそんなことになるんだ！」
「僕が見落としたのはたつたの一度だけだ！ それに比べて君は何度目だ！ 何度ああ
そうかと言った！ 軽く十は超えているぞ！ いい加減しろ！」

片方が塔矢、そしてもう片方はヒカル。

既に人だかりは退散し、ポツンと一人寂しく立つのが、後藤ヒカリこと自分だったり。
盤上を指差しヒートアップする論争は、鎮火するどころか連鎖爆発する勢いで燃え
盛っていく。

「十回じゃない、九回だ！ 勝手に増やしてんじゃねえぞ、塔矢！」

「いいや十回だ！ いい加減に自分の非を認めろ、進藤！」

子供か、と心の中でツツコム。

そう言えばこいつ等まだ小学生だったなど、遠い目をする。

「……どうしてこうなった」

始まりは、ヒカルが塔矢を探して囲碁サロンに入店して来たことから。

今まさに検討を始めようというタイミングで、当事者であるヒカルも当然のように参加。

同年代ということですぐに打ち解け合う両者だったが、段々と雲行きが怪しくなり。結果はご覧の通り。

口論に夢中の塔矢は、進藤への君付けが取れていることには気付いていないだろう。ヒカルも微妙にあつた、強者である塔矢への憧憬など何処かへ行ってしまったている。帰ってもいいだろうか、周りの年寄り連中に習い逃走を凶ろうとして、

「——ヒカリ!!」

しかし、ヒカルと塔矢に阻まれた。

「……なんででしょう」

「お前から塔矢に言つてやれよ！ 俺がああそうか、つて言つたのは九回だつて！」

「勝手に記憶を捏造するな、進藤！ ヒカリ！ 君からもこの分からず屋に言つてくれ！」

「分ならず屋はどつちだ！ この頭でつかち！」

「君ほどの頑固者を見たのは僕は生まれて初めてだ！」

「なんだとお！」

「なんだ！」

そのまま胸倉を掴み合い、至近距離からの威嚇。

大きな溜息を吐き、どうこの場を切り抜けるかと考える。

その時、ヒカルの後ろにいる佐為がそわそわしている気配が伝わってきて、盤面を見渡し、物言わぬ佐為の代わりにと指を指し示す。

「……あたしなら、此処に打つ」

口論はピタリと止み、瞬時に二人は席に着き、こちらの言葉に耳を傾け出す。現金な奴等と冷めた目で一瞥し、続きを促す二人に空気に後押しされる。

「……でも、それだど他の守りが手薄に」

「多少取られるのは仕方がない。それに、結果から見れば損をするのは白の方」

「ほら見ろ、塔矢。俺の攻め方は間違つてなかつたじゃないか」

「負けた奴が検討で偉そうにするのつて相当情けないぞ。あたしには負け犬の遠吠えに聞こえる」

「うぐつ」

「……なるほど、こんな一手があつたなんて」

これで喧嘩は一段落。

ホツと一息着き、自分の指摘を代弁されて喜ぶ空気を出す佐為に若干和んでしまう。

「塔矢」

「なんだ、進藤」

「なるほどつて言つたの、これで二回目だな」

「十回も言つた君ほどじゃないさ」

「勝負だこの野郎！ 下剋上してやんぜ！」

「格の違いを見せてやろうじゃないか！」

そのまま検討は終了。

ニギリもせず、前回と同じように黒がヒカル、白が塔矢のまま第二ラウンドへ。感情的になっていいのか、盤上へ打つ石の音は激しく、その上結構な早打ちだ。とてもではないが、良い碁になる筈もなく、経験の浅さからか早速ヒカルは失着。すぐに気付き、悔しがるヒカルを塔矢は鼻で笑うが、直後の一手は最善の一手とは言い難い。

碁には誠実な塔矢が対局相手を嘲るなんて、完全に頭にきている証拠だ。殴り合いの暴力ではないだけで、それは傍から見ればただの喧嘩でしかなかった。

「……あたしはまた、傍観者か」

以前の自分なら、下らないと一笑に付してしたのに。

気持ちをぶつけ合える彼等が羨ましいなんて、そんなことを思ってしまった。

対局に集中していて気付かないだろうと、そんな考えの元に踵を返す。

検討は終わったのだから帰って当然——そんな言い訳を誰ともなく口にして。

此処には自分の居場所なんてないと、暗雲とした気持ちで出入口へと向かい掛けて、

「

誰かが目の前に立ち塞がる、そんな気配がした。

目の前には誰も居ないけれど、分かっているんだ。

ヒカルや塔矢は気付かなくても、佐為は自分を見ているということに。

佐為が、自分のことを心配して引き留めようとしているんだって、分かってしまったから。

「……………!!」

そのことが、どうしようもなく胸をざわつかせる。

佐為は自分の知る佐為じゃない——でも、彼が佐為であることには変わりはない。

姿なんて見えなくても、そこに佐為がいることは分かる。

声が聞けなくなっただって、佐為が考え付きそうなことなんてすぐに分かる。

だからこそ、胸が痛むんだ。

俯き、熱くなっただ目頭を見られまいとして。

全てを打ち明け、目の前の佐為に縋りたいと、そんな自分の身勝手さを振り切るように。

佐為を迂回するように遠回りをし、今度こそ囲碁サロンを後にする。

「

背中にも何時までも残る、逢いたいと切望する佐為の視線に気付かない振りをしながら。



去っていくヒカリの背中を、佐為は見ていることしか出来なかった。

再び碁を打つ機会と巡り合うことができ、不満など一つだつて有りはしなかったが。

今この瞬間、何もできないこの身が歯痒くて仕方がない。

生涯の全てを囲碁に捧げたこの身、だから気の利いた慰めの言葉の一つも浮かばなくて。

例え浮かんでも、それを伝える方法も、ヒカリが悲しむ原因さえも分かりはしないの

だから、自分がこうして悩んでいることさえも詮無きことに過ぎないのだから。

——幽霊とは、こうも歯痒いものなのですね。

嘆息を零し、ヒカリの出ていった扉をもう一度だけ見遣り、佐為はヒカル達の方に振り返る。

——あれ？

ふと、違和感が頭を過る。

それは、本当に些細なものだった。

普段なら見逃してもなんらおかしくはない、その程度のものでしかなかったけれど。その時、佐為にはどうしようもなく気になって仕方がなかったから。

——先程、ヒカリは……私を、避けた……？

態々遠回りをしてまで、ヒカリは佐為を避けた。

あのまま進んでいたら佐為とぶつかっていたのだから、ヒカリの行動は当然のものだ。

もつとも、それは佐為が幽霊で、誰にも触れられず認識されない存在でなければの話だ。

他にも理由があつての遠回りではないかと周りを見渡すが、理由らしい理由も見当たらず。

先程まで些細な問題でしかなかった違和感が、どんどん膨らんでいく。

——まさか……まさか、ヒカリは……私のことが——

それ以上の思考は、突然のざわつきによつて掻き消される。

——あの者は……!?

入口から入つて来たのは、着流しを纏つた初老の男だった。

だが、ヒカルと塔矢の口喧嘩に巻き込まれてはと静かだった碁会場が、その男の登場と同時に俄かに騒ぎ出す。

碁会場中の者達が、自分達の対局さえも放り出し、その男の元へと向かう。

途端に形成される人だかりに、しかし男はやんわりと断りを入れ、こちらへと向かって来る。

佐為と相対し、当然のようにこちらには気付くことなく、ヒカルと塔矢の対局を観戦。男に習うように、二人の対局に目を落とす——ゲツとらしくもない声を上げた。

——ひ、酷いつ!?

惨状である、紛うことなき惨状だった。

碁は、打ち手の棋力もだが、その者の心の強さも直結する。

常に平静であることも強さの一つだが、感情的になることもまた心の強さの一つ。

要は自分の感情を力に変えられれば良いのだ。

だからこそ、ヒカルと塔矢の一局は、思わず目を背けたくなるほどに酷いものだった。感情を制御するなど、幼い身である彼等に来る筈もなく、冷静さを失っているせい。か強引な打ち筋が目立ち、感情だけが空回りしている。

例えるなら、防御を捨て全力で斬り合っているようなものだ。

——あわわわ!?! どうしてこのようなことに! ちよつと目を離したただけなのに!?

思わず顔を両手で覆った佐為は、チラリと横目で隣の男の様子を伺い、

——へ?

彼が静かに笑っていることに、不思議そうな声を上げる。

「……アキラもまだまだ子供だと言うことか」

それは、まるで我が子の成長を見守る親のように。

そして、塔矢の向かいに座るヒカルには、息子の友達を歓迎する父のように。見るに堪えない盤上を、慈愛の籠った眼差しで、その男は見守り続けていた。

——なるほど、そう言うことだったのですね。

佐為は知っている。

目の前の男もまた、自分が対局を切望する者の一人。

日本囲碁界の重鎮にして、現代最強の打ち手と名高い。

塔矢の姓を持ち、アキラと似た顔立ちをした、その男の正体は。

——あなたが、塔矢行洋。

過去と現代、共に最強の碁打ちが相見えた、最初の瞬間だった。

まる6

「ヒカリ、次の週末って暇？」

「……なんだよ、いきなり」

給食とは実に素晴らしいシステムだとヒカリは思う。

熱々の、バラエティーに富んだたくさん品の数の料理が一堂に揃う、その光景は壮観だった。

限られた予算で大量生産された故に味はチープ極まりないが、それも魅力の一つだろう。

パサつくパンをシチューに浸しながら、向かいに座るヒカルへ相槌を打つ。

「塔矢の親父さん、塔矢行洋だっけ？ 囲碁サロンでヒカリが帰った後に、入れ違いで来てさ。なんか知らないけど家に遊びに来ないかって誘われたんだよ」

「……………はい？」

絶句。

ベチヨつとパンがシチュー塗れになるが、そんなことはどうでもいい。

固まるヒカリには頓着せず、ヒカルは話しを進めていく。

「後で知ったんだけど、塔矢の親父さんって凄いい碁打ちだったんだな。俺って打つことばつかで、プロの打ち手とか全然知らないからさ。なんか見覚えのある人だなあつて思つて、知り合いに聞いたたらビックリ仰天。通りで塔矢の奴、馬鹿みたいに強い筈だぜ」

呑気にシチューを掻き込むヒカルだが、この男はこの重大さを理解しているのか。

というか、話を聞く限りでは、塔矢行洋は自分とは入れ違いに来たようだが、それから彼が見たのはヒカルと塔矢の子供の喧嘩のような対局ということになる。

アレの何処が塔矢行洋の琴線に触れたのか。

碁打ちとしては尊敬できるが、学校の校長先生のように厳格なイメージ故に若干の苦手意識のある自分には、未だにあの人のことは良く分からない。

「でも助かったぜ。塔矢の家に行くの初めてだったから、正直ちよつと不安だったんだ」

「……………ん？」

「ご馳走さん！　じゃ、俺は先に対局の準備してつから、お前も早く食べちまえよ！」
「——ちよっ!？」

伸ばした手は届かず、呼び掛けは虚しく響くだけ。

喧騒に包まれる教室に、ポツンと一人、呆けた状態で座ったまま。

「……勝手に決めんなよ、馬鹿」

嘆息を零し、スプーンを使ってシチューに沈むパンの救出を試みる。

そのままでの救助は困難と見なし、そのまま分割作業へと移行。

食べやすい大きさに分けたパンを口に運び、モグモグと口を動かす。

「——で？　何時まで聞き耳立ててんの？」

ガタツと、真後ろから椅子の鳴る音が響く。

ゴクつと、嚙下し次のパンを掬い上げながら、視線は前を向いたまま。

「……えっと」

「盗み聞きなんて、藤崎ってば大胆」

「ち、違うよひーちゃん!？」

「そう。じゃあ、進藤に話しても問題ないよね」

「……ひーちゃんのイジワル」

ゴロゴロと転がる大きめのジャガイモを頬張る。

女の子特有の小さな口をもどかしく思いながら、よく煮込まれた芋はホロホロと口の中で間を置かずに溶けていく。

「聞き耳なんか立てなくても、行きたいんなら行きたいって言えばいいじゃん」

「……言ってもきつと嫌な顔されるよ。ヒカル、いつも私のことお邪魔虫扱いするもん」

「あー……ヤバい、普通にあり得そう」

「……ひーちゃんってホント遠慮ないよね。普通そういうのってこう、オブラートに包むとか……」

「分かる嘘ついてどうすんの。自覚してる奴に嘘言つて余計な気を遣われてるんだって思わせるより、正直言つてあげる方がずっとマシつてもんでしょ?」

「……それは、そうかもだけど」

「それに、あたしだって誰彼構わずには言わないよ。相手が藤崎だから言っただけ」
「……やっぱり、ひーちゃんは大人だね」

紙パックの牛乳にストローを突き刺し、ズゴーと音を立てて一気飲み。

あかりはヒカリを大人だというが、女子力に限っては圧倒的に彼女に軍配が上がる。
男女の異名は伊達ではなく、食事一つ取ったつてお淑やかさなど欠片だつてない。

チラリと肩越しに振り返れば、行儀よく座りながら、小さく千切ったパンをチビチビと口に運ぶ、ドンヨリと落ち込んでいるあかりの姿が。

所作一つとっても溢れる小動物染みた癒し効果、流星はクラス人気ナンバーワン女子。

そして、そんなあかりに一途に思われながら、気付かないどころか鬱陶しがる鈍感男子。

「潰す」

グシャッと、握り締めた紙パックが悲鳴を奏でた。

佐為の一件は未だに心に引き摺つてはいるが、謎の補正のせいであまり気にならな
い。

呑気に鼻唄など歌いながら碁盤と碁石を準備する愚か者に天誅を下さねば。

「……潰すつて、どうかしたの？」

「いやなに、幸せ者な進藤に嫉妬しただけ」

「……嫉妬？」

「女の敵は成敗しなきゃな。碁については、このあたしに任せなさい」

首を傾げるあかりに苦笑し、合掌の後に席を立つ。

ついでにと、去り際にあかりの耳元へと顔を寄せ、

「進藤は強敵だぞ。頑張れよ、藤崎」

「……へ？」

そんな捨て台詞を囁き、食器を片付けるべく教卓付近へ。

ケースに食器を戻し、お手洗いにと教室を出る間際、チラリとあかりの方を向けば、

「……………」

プシュー。

そんな擬音が付くくらい、真っ赤になりながら煙を出す恋する女の子を目撃するのだった。



突撃、お宅訪問である。

「……で、何であかりまで着いて来てんだよ」

「べ、別に良いでしょ。私だって少しは碁打てるんだし、いても邪魔にならないし」

「だからってなあ——」

「あとこれ、塔矢君に渡してあげて。どうせヒカルのことだから手土産なんて持ってき

てないんでしょ？」

「お、おう……サンキュー」

「……それと、これ……クッキー作り過ぎちゃったから、皆でどうかなくて……」

「マジかよ！ あかりのクッキー美味いからな、今から楽しみだぜ！」

「う、うん……」

爆ぜろ。

「じゃ、さっさと入ろっか」

砂糖菓子の上に蜂蜜でもぶっかけた様な、甘々な桃色空気。

インターホンを押すヒカリの指先に迷いはなく、それほど間を置かずに、これぞ日本家屋といった風の住居の前に聳える門から塔矢が現れた時は、これ以上ないほど安堵したほどだ。

「この前ぶり。あの時は勝手に帰って悪かったな」

「よっ、塔矢。邪魔するぞ」

「いらつしやい、ヒカリ。……あと、進藤も」

「なんだその嫌そうな顔は」

「えっと、隣の君は……」

「聞けよ人の話」

「あつ、初めまして。私、ヒカルとひーちゃ……ヒカリちゃんの友達の藤崎あかりです。

ごめんなさい、事前に連絡もなく押し掛けちゃつて……」

「ううん。気にしなくていいよ。いらつしやい、藤崎さん」

「ありがとう、塔矢君」

「ごんにやろう……!!」

遺憾なく発揮される塔矢の紳士スマイルは、早くもあかりの警戒心を解き解す。

副作用としてヒカルの怒りを買うのは仕方のないことだった。

突撃秒読み前なヒカルの首根っこを引っ掴み、あかりから渡された手土産を渡すように促す。

「ほれ、進藤」

「……ほらよ、塔矢。つまらないもんだけどな」

「藤崎からの貰い物なのに、何でそんなに偉そうなんだよ」

「……やっぱりか。正直明日は槍でも降るんじゃないかと本気で思ってたよ。進藤が手土産なんて気の利いた真似をするなんて」

「お前等は毎度毎度一言多いんだよ！」

ウガーツと襲い掛かって来るヒカルだが、それは後一步のところでも留まることに。

「いらつしやい。よく来たね」

塔矢に遅れる形でやって来たのは、彼の父である塔矢行洋。

普段の厳格な面持ちを見慣れているが故に、穏やかな好々爺然とした表情は中々に新鮮だ。

外行き用ではない、ラフな着流し姿は、今の塔矢行洋がプロの碁打ちではなく、塔矢の父親としてこの場にいるのだということが十二分に伝わって来た。

「あ、あのこれ。クッキーを作ったので、良かったらどうぞ」

「ありがとう、後で皆で食べよう。ところで、君も進藤君の友達かい？」

「はいっ。藤崎あかりって言います。今日はよろしくお願いしますー!」

「ははっ、これはご丁寧に、藤崎君。私はアキラの父、塔矢行洋。それと、そんなに畏まらなくてもいい。楽にして構わないから」

「は、はいっ!」

「それと、もう一人が——」

ドキッと、心臓が跳ねる。

あかりからこちらへと視線が移った途端、気のせいだったのかもしれないけれど。

一瞬、まるで対局中のような鋭い気迫が、自分に向けられているような。

でも、塔矢行洋は相変わらず穏やかな表情のまま、こちらへと手を差し伸べてきた。

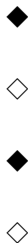
「アキラから話は聞いているよ。初めまして、後藤ヒカリ君」

「…………ご丁寧にどうも、塔矢先生」

握り返した手は、碁打ちの手。

掌の皺の数はその人の歴史を、擦り減った指先はその人がどれだけ碁と向き合ったのかを。

塔矢行洋という一人の碁打ちの象徴するような、そんな想いを抱いてしまう。衝動的に湧いた、この人と打ちたいという欲求から逃れるように、すぐに手を離すのだった。



「うわー！　また負けたー!？」

座敷にヒカルの絶叫が響く。

正座が苦手で、胡坐を掻くヒカルの様に、向かいに座っている塔矢行洋は咎めることはない。

「アキラから聞いていたが、半年でここまで打てるとは」

「でも、塔矢は三子で打ってるんでしょ？　俺はそれよりも置き石の数が多いの……」

「アキラは物心着く頃から碁に触れているからね。君の成長速度は確かに目を見張るも

のがあるが、アキラと比べるとはまだ早いと言わざるを得ない」

「ちえー……でも、いつか絶対に追い付いて追い越してやる」

「その意気だよ、進藤君」

碁石を片付けるヒカルを見る塔矢行洋の眼差しは、眩しい者を見るようで。

なんとなく、考えていることが分かるような気がする。

碁は日本に古くから伝わる遊戯だが、主な競技年齢は中高年。

塔矢くらしいの年頃は只でさえ少ないのに、そんな子供達が集う大会への出場は禁じられている。

別に意地悪をしている訳ではない、単純に塔矢が強過ぎるのだ。

既にプロに匹敵する塔矢が大会など出るなど、完全な弱い者苛め以外のなにものでもない。

人は高過ぎる壁の前に、多くの者は為す術もなく諦め、挫折を経験する。

そこから立ち上がるのは大人達でも困難、心身ともに未熟な子供なら尚更だ。

だけど、きつと心の何処かでは塔矢行洋も望んでいたのだろう。

塔矢の強さに折れず、真つすぐに息子と向き合ってくれる、同年代の碁打ちの存在を。

塔矢行洋がヒカルを家に招き、こうして何度も対局することからも、彼の喜びが伝

わってくる。

「……どう見ても、完全な親バカだよな」

シミジミと呟くヒカリだが、そこに非難するような色は見えない。

記憶にある塔矢行洋とのギャップに、微笑ましいものを見るようだった。

「や、やった！ 私の三目半勝ちだ！」

「おめでとう、藤崎さん」

「ありがとう、塔矢君！」

背中から聞こえる歓声に、ヒカリはそちらへと目をやる。

諸手を挙げて喜ぶあかりに、塔矢は笑顔で応じていた。

碁の才能と言う点で言えば、あかりは平凡と言っていた。

ルールを覚え、定石を理解し、漸く自分がこう打ちたいと思えるようになったレベルだ。

今回の対局、置き石もたくさん、内容も指導碁の域を脱していないが、それでいい。

今のあかりに必要なのは知識でも経験でもない、碁が楽しいという快感。初心者故の癖のないあかりの打ち筋は、これから先に繋がる無数の可能性に満ち溢れていた。

「やるじゃん、藤崎」

「えへへ……碁って楽しいね、ひーちゃん」

「おつ、ようやく藤崎も碁の真髄を理解したようだな。だが、道はまだまだ険しいぞよ？」

「はいっ、不肖この私、藤崎あかりはこれからも頑張つて精進するであります！」
「よろしい」

相好を崩し、あかりは花が咲く様な可憐な笑みを零す。

見ているだけで幸せな気持ちになるとは、なんとという癒し効果。

釣られるように笑うと、視界の端に映った塔矢がハツとしながら立ち上がった。

「そ、そろそろ一度休憩しない？ 藤崎さんから貰つてクッキーもあるし」

「アキラは座っていないさい。茶請けの準備は私のようにやるから」

「え、でも……」

「せっかく友達が来ているんだ。このくらい私がやるさ。明子も今は出掛けているし、たまにはこういうのも悪くはない」

「……そういうことなら」

納得の形を見せる塔矢と入れ替わるように、塔矢行洋の背中を追い掛ける。

「あたし、手伝いますよ」

「あつ、なら私も——」

「藤崎は此処にいて。進藤のブレーキ役がいないと不安だから」

「どういう意味だよ！」

「そのままの意味だ、進藤。いい加減自覚しろ」

「自覚するのはお前の方だろうが、塔矢！」

「僕は何時だつて冷静だ！　すぐにカツとなる君とは違う！」

「やるかこの野郎！」

「いいだろう！　勝負だ進藤！」

「——という訳だから。藤崎、後はよろしく」

「ははっ、了解」

あの二人、碁を喧嘩の道具か何かと勘違いしていないだろうか。喧しく罵り合う二人の騒音を、襖を閉じてシャットアウト。律儀に待つてくれている塔矢行洋の元へと駆けていく。

「すまないね、後藤君」

「気にしないでください。五月蠅いのはこっちから願い下げなので」

塔矢家には、記憶の中でだが何度も訪れたことはある。

しかし、相変わらず見事な家だ。

下世話な話になるが、流石は複数のタイトルを持つ高所得者というべきか。訪れた台所で、華美ではない、しかし品のある質素な食器を並べている時だった。

「君は打たないのかい？」

急須と湯呑にお湯を注ぎながら、塔矢行洋は何気なしに聞いてきた。

「あー……その、今はそういう気分じゃないので」

「それは残念だ。君と打てるの楽しみにしていたんだが」

食器を並べる手が止まり、しかし塔矢行洋の口は淀みない。

「君とアキラの対局、アキラから教えてもらったよ。君ほどの打ち手、プロでもそうはいない」

「……塔矢先生ほどの打ち手にそう言って貰えるなんて感激だな」

「隠さなくていい。君とて理解はしているだろう。君の棋力はどう見積もっても高段者クラスは確実。それも、タイトル戦に挑戦できるほどのだ」

「……煽てたって、あたしに出来ることなんて何もありませんよ」

動揺を隠すように、止まっていた手を動かし続ける。

だが、その間も背中中の視線は離れることはなく。

観念するように振り返ると、真剣な眼差しにぶつかる。

そこにいたのは、先程まで相対していた塔矢の父親ではない。

プロの碁打ち、塔矢行洋として、彼は自分を真直ぐに見詰めていた。

「私は、君と打ちたい」

そして、打ち明けられた想いもまた、真つすぐだった。

「無理は承知のつもりだ。その上で、私と打ってほしい。互先で、君の全力を私に見せてくれ」

ドクン——。

あまりにも魅力的な、今の自分にとっては毒にもなる誘い。

逡巡する自分を、答えを待つ塔矢行洋はただただ見守り続けるのだった。

まる7

最初は、ただの冗談だと思った。

親のひいき目などなしに、息子のアキラの棋力は既にプロの領域に達している。

多くの碁打ちが我が家には引つ切り無しに訪れ、物心つく頃から毎日のように打ってきた。

碁打ちを志す環境として、これ以上のものは存在しないだろう。

だが、それ以上に、アキラの碁を愛する気持ちだが、彼を今の高みへと押し上げてきたのだ。

同年代では敵なし、なるほどその通りだろう。

アキラが大会に出れば若い芽を摘むことになる、それだけの差が他の子供達とはあつたから。

だからこそ、アキラが並べてくれた一局を見るまで、信じることなど出来はしなかった。

——これが、アキラと同一年の子供が発する空気か。

そして、実際に相対してみても、信じざるを得なくなつた。

重圧、氣迫、そして今この瞬間も増す威圧感。

それらを発しているのが、見下ろすほどの身長差のある華奢な女の子だという現実。直接この目で見て、感じているというのに、白昼夢でも見ているようだ。

—— たつた十二歳の子供が、私達と同じ領域にいるというのか。

鬼才、非凡、奇才、天才—— 知りうる限りの言葉でも、目の前の少女を評すには足りない。

一体、誰が信じるのだろうか。

座間王座や一柳棋聖、桑原本因坊達と遜色ない、棋士の中でも数えるほどの強者の空気を、中学生に上がっていない少女が纏っているなど。

思い出すだけでも、身震いがする。

投了したヒカルの碁を引き継ぐ形で始めた、アキラとの一局。

果たして、自分が同じ立場なら、半目差まで縮めることが出来ただろうか。

あれだけの差があってもなお、勝利を諦めなかつただろうか。

それを成したのが、アキラと同一年の女の子だったなど、一体誰が信じるというのか。

——これだから、碁とは面白い。

あまりにも謎多き、後藤ヒカリという少女との出会い。

彼女が歩んできた道筋、どうやってあれほどの棋力をその幼い身でものにしたのか。気にならないと言え、それは嘘になる。

しかし、そんなことは後回しにすればいい。

ヒカリが詮索するなどのなら、それでも構わない。

生まれも、肩書も、思想や価値観さえ、自分にとっては重要ではない。

碁さえ打てれば、神の一手へと少しでも近付けるのならば、それだけで。

「お願いします」

「……お願いします」

黒は塔矢行洋。

白は後藤ヒカリ。

既に塔矢行洋の中で、ヒカリをただの少女と思う気持ちは消えていた。想定するのは、自分の中に今もなお息衝く、歴戦の覇者たち。

それでもまだ、まだ足りない。

気付けば浮かんでいた笑みは、背筋を伝う汗は、武者震いさえも。

碁の神様がいるというのなら、抱く思いは感謝のみ。

盤上に点在する、九つの星。

その一点へと、最初の一手となる黒の碁石を打ち付けるのだった。



結論から言えば、ヒカリは塔矢行洋からの申し出を受けることにした。

碁盤を挟み、こうして相対している今も、心の中では迷いがある。

今すぐにも此処から逃げ出し、碁からも遠ざかりたいという気持ちは続いていた。

最強の棋士、塔矢行洋との対局なんて、この先あるか分からない。

でも、今の迷いを抱えている状態で打つのは、塔矢行洋に失礼なのではないか。それでも、打ちたい——いや、打たなければいけない。

この一局を逃せば、大切な何かさえも失つてしまうような、そんな気がしてしまつたから。

「——っ!?!」

空気が、重圧を増す。

まるで重力が増しているかのように、重く押し掛かってくる。

こちらの想いを見透かすように、力強い一手が放たれた。

同時に、酷く懐かしく感じてしまう。

かつて、自分が進藤ヒカルだった頃、幾度も体感した記憶。

高段者特有の重圧、タイトル戦特有の雰囲気、命さえも燃やし己が全てを賭ける。そんな、頂点にいる者達だけが見ることが許された、頂の光景。

——本気だ、塔矢先生は。

冗談などではなかった。

小学生の小娘相手に、日本最強の棋士が全力になってくれた。

年の割に分不相応な、絶対に有り得ないと断じられて当然の棋力を持つ、自分などのために。

そうだ、塔矢行洋とはこういう人なのだ。

生まれも、肩書も、全てが関係ない。

碁さえ打てれば、強い者と打てさえすれば、この人は満足なのだ。

そして、そんな塔矢行洋に、自分は認めてもらえた。

応えないと、応えなければ——否、応えたい、全力で、己が全てを持って。

——この人に、塔矢行洋に勝ちたい。

佐為を除けば、最も尊敬する碁の打ち手。

正直に言えば、今まで勝とうなどと思ったことなどなかった。

憧れが強過ぎて、そういう気持ち湧かないくらい、佐為と同じ遠い存在だったから。

——でも、だからこそ……あたしは勝ちたい。負けたくない。

脳裏を過る、佐為と塔矢行洋との最初で最後の対局。

結果は白——佐為の中押し勝ち。

だが、直前の手順を間違えなければ、結果は変わっていた。

全ては終わった後のこと。

あの時こうしていればなんて仮定、数えればキリなどありはしない。

それでも、佐為は心残りだった筈だ。

長年対局を切望し、漸く叶った大切な一局なのだから。

だから、これは自分だけの戦いではない。

自分の師でもあり、為すことの出来なかつた、塔矢行洋への完全なる勝利。

——勝ちたい、負けたくない、塔矢行洋にも、佐為にだって、あたしは強くなつたんだから。

もう、昔のように見ているだけの自分ではない。

ヒカリは強くなった。

そして、その棋力は、日本囲碁界の一角、本因坊のタイトルを奪取するほどまでに。

だから、証明するんだ。

何もできない、見ているだけだった無力な自分という、そんな過去から抜け出す。立ち止まっていたって、事態が良い方向に進む保障なんてどこにもないんだ。

そう、あの時と同じ――。

佐為が居なくなり、彼を探し、もういないと理解して、失意の底に沈み、碁から離れた。

あの時と今の自分は、全くの同じではないか。

そして、あの頃の自分が立ち直れたのは、碁を打ったからだ。

――見てて、佐為。あたし、勝つよ。最強の棋士、塔矢行洋に。絶対に、勝つよ。

自分にあるのは、碁だけ。

だから、進むために必要なのは、碁を打つこと。

そのためにもこの一局、全力を尽くす以外にある訳がないのだから。



「だーかーらー！ 何回同じこと言わせんだ！ このなるほど君め！」

「君こそ！ ああそうかが口癖か！ これほど納得しておいてどうして喧嘩腰になる
！」

「ひ、ヒカル!? 塔矢君も！ おお、落ち着こうよ！」

生涯の好敵手というものがあるのなら、それは目の前の二人だろう。

白熱した検討を交わすヒカルと塔矢を見る佐為の眼差しは、最初とは変わっていた。
羨ましいと、そう思えてしまうのは、そう言った存在が自分にはいなかったからか。
つくづく、この時代に、ヒカルと巡り合えて良かったと思う。

前の宿り主である虎次郎——本因坊秀策といった頃は、ただ毎日碁が打てることが幸せ
だった。

対して、自分ばかりで打たせてくれないヒカルには不満はある。

それ以上に、たくさんの碁打ちと巡り合えたのは、宿ったのがヒカルだったからで。

——ヒカルが、私をヒカリへ巡り合わせてくれたのですよね。

粛々と、嘯み締めるように。

そう、ヒカルには感謝している。

しかし、しかしである。

——打ちたい打ちたい打ちたい！ 私も打ちたい！ ヒカルだけズルいです！

遂に我慢の限界だった。

ヒカルに塔矢、更には現代囲碁界最強との呼び声高い塔矢行洋まで居るのだ。

そんな中に、ただ見ているだけなど、生殺し状態に等しい。

駄々を捏ねるように畳の上を転がり回り、バタバタと手足を出鱈目に振り回す。

「だー!? お前等うるさいぞー！」

「進藤のどの口が言うー！」

「ヒカルが一番うるさいよー！」

——打ーちーたーいーでーすー！

「うるっせええええええええええ!!」

高級住宅街の一角で、ヒカルの叫びが迸る。

ゼエゼエと息を荒くするヒカルだったが、ふと周囲を見渡す。

「……そう言えば、ヒカリ達遅いな」

「あつ、もうこんな時間なんだ。結局ヒカルと塔矢君、一局打ち終えちやったもんね」
「それだって、幾らなんでも遅過ぎるよ。お父さん、どうしたんだろう？」

誰もが答えを見出せない中、ハッとヒカルは顔色を変えた。

「まさか、ヒカルの奴!？」

「ど、どうしたのヒカル!」

尋常ではないヒカルの様子に誰もが息を呑む。

そして、次の瞬間、勿体ぶる様にヒカルが口にした、彼が導き出した答えに、

「ヒカリと塔矢先生、あかりのクッキーを独り占めする気なんだ!」

「馬鹿か、君は」

「馬鹿じゃない、ヒカル」

——薄々感じてはいましたが、ヒカルって馬鹿なのですね。

全員が揃って同じ答えを導き出す。

しかし、聞こえていないのか、それとも無視しているのか。

飛び出す様に座敷を後にすると、ヒカルは廊下へと駆け出して行った。

「もうっ、ヒカルったらー！」

「追い掛けよう。進藤の奴が何を仕出かすか分かったものじゃない」

——ヒカルに代わって謝ります。申し訳ありません。

既にヒカルの姿は見えないが、それほど距離は離れてはいない筈。

正確に測った訳ではないが、自分はヒカルと一定距離は離れられないのだ。

そして、塔矢が向かう先は、ちょうどヒカルの気配がする方向にも合致している。

でも、この感じは一体何なのだろう。

一歩踏み出すごとに、ヒカルのいる方へ近づく度に。

胸がざわつき。

体が、早く動けと、自分自身を急かす。

「ヒカル！ 余所の人の家を勝手に搜索するなんて非常識——」

そして、襖の開け放たれた、とある一室に飛び込んだ時。

先頭のヒカルが立ち尽くし、塔矢は息を呑み、あかりは言葉を言い切ることなく。先程の胸騒ぎの正体を、佐為はその双眸でしかと目にする。

——これは……!?

ヒカリ、そして塔矢行洋。

二人は碁盤を挟み、互いが鎬を削り合っていた。

あれほどの騒ぎにも気付かないほどの集中力。

声を掛けることさえ戸惑う、凄まじいまでの重圧。

何よりも、呼吸さえも忘れてしまうほど、盤上の対局は見事という他なかつた。

——なんと……なんと……。

今この瞬間、この場に立ち会えたことを神に感謝する。

それほどまでに、二人の生み出す盤上の景色は美しかった。

その一つ一つが最善の一手であり、最強の一手でもある。

黒と白が盤上を縦横無尽に駆け巡り、それらは緻密な計算と読み合いによつて成り立つ。

佐為の眼には、まるで宝石のように盤上の石一つとつても輝いて見えた。

——これほどの碁が、この世に存在するなんて。

塔矢行洋の黒石が盤上へと投下される。

右辺の攻防を無視するような、一見悪手に見える左方への一手。

しかし、先へ先へ、可能な限りの読みを行えば、それは盤上を支配している。

まるで未来が見えているかのような、そんな可能性の黒石。

だが、佐為が對抗するための一手を模索している間に、ヒカリは白石を掴んだ。

そして、ヒカリの放った白石は塔矢行洋の可能性を切り捨ててしまう。

自分では考え付きもしなかった、それは新手返しと呼ぶべき一手。言葉を失う佐為を置いていくように、塔矢行洋は返しの一手を放つてく。

——私の知らない世界が、二人には見えているというのですか。

突き付けられた現実、それさえも打ち消してしまふ感情。

己の未熟さを嘆くよりも、更に上が存在することに歓喜する。

ヒカリと塔矢行洋は、間違いなく自分よりも優れた碁打ちであると確信できた。過去に最強の碁打ちとして名を馳せた本因坊秀策よりも、強い存在。

それは、今よりも更に神の一手へと近付くことの出来る、確かな道標となる。そのことが嬉しくて、堪らなく喜ばしくて。

——しかし、これは……ややヒカリが有利。

半目が勝負を分ける、それほどまでの接戦。

そして、現時点で言えば、ヒカリはコミの分だけ差を着けていた。

このまま逃げ切れれば、ヒカリの勝ち。

しかし、この時、佐為は忘れていた。

ヒカリと相対している相手が、誰なのかを。

長きに渡る碁の歴史、その中でも類を見ない最強が、ヒカリの相手だということ。

「……っ!!」

老いてもなお、研ぎ澄まされた刃が牙を剥く。

中央に打ち込まれた、渾身の黒の一手。

白の連絡を断ち、自らの陣が敵陣へと侵食していく。

黒と白の形勢が逆転した瞬間だった。

——ヒカリ!?

顔を歪めるヒカリに、佐為の声は届かないだろう。

それでも、彼女の負ける姿など見たくなかった

身を乗り出し、扇子をギュツと握りしめる。

何か、何か手はないか。

逆転は出来ずとも、振り出しに戻す、そんな一手が。

だけど、どれだけ盤上を見渡しても、そんなものはどこにも存在しない。もはや確定した未来なのか。

ヒカリが塔矢行洋に敗北するのは、避けられない運命なのか。

——負けないで……負けないで、ヒカリ！

それは、あまりにもちっぽけな願い。

現世で味わった、黒石を持つての初めての敗北を喫した相手がヒカリというだけの理由。

だけど、湧き上がる衝動を、佐為は抑える術を知らなかったから。

——なりません！ 負けないで！ 私が勝つまで、あなたは負けてはいけません！

！

ヒカリは、佐為にとって超えるべき最初の目標。

例え今この瞬間、成仏するようなことがあった場合の、一番の心残り。

ヒカリに勝ちたい。

勝つまで絶対に、しがみ付いてでも現世から離れるものか。

ヒカリの勝利するその時まで、何があろうとも、必ず。

——勝ってください！ ヒカリ！

万感の想いと共に、伝わる筈のない想いを、佐為は口に出さずにはいられなかった。



投了。

ヒカリに突き付けられた、たった二文字の現実。

どれだけ考えても、どれだけ盤上を見渡しても、活路を見出すことが出来ない。

それでも、負けたくなくて。

だけど、どれだけ逆転の一手を模索しても、見付けることが出来なくて。

——佐為。

自然と頭を垂れ、ギユツと握った拳が無念で震える。

それは、まるで懺悔のようだった。

今はいい、志半ばで消えてしまった師匠への、晴らすことの出来なかった無念。塔矢行洋への完全勝利。

あと少し、あと一歩というところまで追い詰めたのに。

その一歩が、果てしなく遠い。

あの時こうしていれば、そんな後悔ばかりが浮かんでしまう。

そんな想像に、もしもなんてものに意味などないのに。

——佐為っ。

ごめん、ごめんなさい、弱くて、情けなくて、あなたの無念を晴らせなくて、ごめんなさい。

佐為ならきつと、こうはならなかった。

あのまま消えることなく、現世に留まり続けていたのなら。

塔矢行洋にだつて負けない、最強の碁打ちになることが出来たのに。

自分のせいだ、自分が碁を打つことに固執したから、佐為に全部打たせていれば。

佐為は凄かった。

今の自分と同じ状況でも、佐為なら堂々としている。

真つすぐに前を向いて、笑つて相手を見据えて、そして扇子を盤上に指し示すんだ。

——佐為っ！

そして、その一手は。

ヒカリにとつて、碁の神様が指し示した先には。

ずっと追い求めてきた、神の一手が、起死回生の活路が。

「……………あ」

刹那、ヒカリは見た。

盤上の一点を指し示す、純白の扇子を。

「!!」

考えるよりも先に、体が動く。

碁笥から飛び出す白石が宙を舞い、盤上へと舞い降りる。

確かに見えた、扇子が指示した場所へと、神の一手が放たれた。

「……………」

長い、長い時間が流れる。

秒針が拍を刻むことを忘れてしまったかのように。

物音一つ、息遣いさえも聞こえない、静寂が世界を包み込む。

「……………ふっ」

呼気。

長い時間、張り詰めていたものを解き放ったのは、ヒカリではない。

「……………これだから、碁は止められない」

座したまま、盤上を見詰める塔矢行洋の顔に、厳しきは影すら見せない。満足げに吐かれた息も、緩んだ眺も、全てが満足感に満ち溢れていた。

「……………つつ……………つつ、あ……………」

尽くした死力を弛緩させ、座した両足を広げ、ペタンと臀部が座敷へと沈む。俯き、肩を震わせ、声を詰まらせ、ギユツと握った拳は震え続ける。ポタポタと、幾度となく流れ落ちる涙は、枯れることなく。

——どうして、忘れていたんだろう。

忘れる筈なんてなかったのに。

強さを求めて、求め続けて、日本囲碁界の最強の一角にまで上り詰めて。

強くなることに固執するあまりに、いつの間にか見失っていた。

己の半身、進藤ヒカルとして記憶が、鮮明に蘇ってくる。

佐為が居なくなり、彼を探し、もういないと理解して、失意の底に沈み、碁から離れた。

自分の我儘で、神の一手を極めることなく、志半ばで現世を去っていったことを、悔いた。

そんな自分が立ち直れたのは、前を向いて進み続けると決意したのは――。
あの時と同じ。

溢れ出る涙を止めることが、ヒカリには出来なかった。

「ありがとう、ヒカリ君。――君と打てて良かった」

そう言つて、塔矢行洋は頭を下げた。

「負けました」

遅れて、ヒカリも頭を下げた。

「……ありがとう……ござい、ました……っ!!」

佐為はいた。

消えていなかった。

今この瞬間も、確かに存在していた。

佐為に会うただ一つの方法は、碁を打つこと。

ヒカリの碁には碁の神様——藤原佐為が息衝いているのだから。

エピソード

春、桜芽吹く頃――

「……似合わない」

自室の鏡の前で、ヒカリはそうぼやいた。

目の前に映るのは、今日から通うことになる葉瀬中学校の制服を纏う異国の容姿をした女の子。

暗色のセーラー服が、自分の金髪と緑目の存在をより引き立たせる。

ガツクリと肩を落とし、直後、インターホンの鳴る音にスカートを翻し、自室を飛び出す。

リビングで寛ぐ両親に手を振りながらの行つてきますを言い放ち、玄関の扉を開けた。

「遅いぞ、ヒカリ」

「おはよう、ひーちゃん」

最初にぶつきら棒な、次いで明るい口調で。

それぞれが真新しい、サイズの大きな制服を纏ったヒカルとあかりの登場である。

「……進藤も似合わないね、制服」

「ほっとけ!」

「だよー。なんていうか、物凄く着られている感が……ヒカル、小っちゃいもんね」

「お前らが女のくせにデカ過ぎるのが悪いんだろうが!」

「天誅」

「ぎゃああああああつ!」

ヘッドロックでヒカルを落とし、毎度な光景にあかりはクスクスと笑みを零す。

ちなみに、ヒカリもあかりも女子の中では背は高いが、バカ高い訳でもない。

女子の方が男子よりも早熟、かつ単純にヒカルの背が平均以下なのもその印象を助長させる。

ヘッドロックが実に決めやすい身長差だから、ヒカリ的には丁度いいのだが。

「まつ、安心しろ進藤。お前はそのうちあたし等を超すから」

「げほ、ごはっ……あ、当たり前だろうが！ 絶対に追い抜いてやるから覚悟しやがれ！」

「はいはい、中学卒業するくらいまでは期待せずに待つてあげようよ」

「わ、私は別に、今のままのヒカルでも……」

チヨンチヨンと指先を突き合わせるあかりはスルー。

先に行くヒカルに追い縋り、身長差ゆえに見上げながら遅めの身長高度成長期を誓うヒカルがそれに気付くことはなく、慌てて後ろからあかりが追いかけて来る。

「あ、ひーちゃん。制服、似合ってるね」

「……あかりには敵わないって。別に親に不満はないけど、黒髪に生まれてたらなっつてこういう時はつくづく思っちゃうよ。誤魔化せる私服と違って、制服って似合わない奴はとことんだから」

「うーん、私はそんなことないと思うけどなあ……」

「ヒカリのその髪じゃ、どうやっても目立つのは仕方ないだろうが。いい加減諦めろよ」

「前髪金髪に染めてる進藤に言われても」

「俺のこれは生まれつきだ！」

知ってます。

「でも、私達も今日から中学生かあ……」

感慨深げに、頭上の桜を見上げながらあかりはそう零した。

艶やかな髪が花弁と一緒に風に揺らぐ様は、まるで一枚の絵のようだ。

住宅街から離れて暫く、他の学生達と合流しつつあるが、誰もがこちらを一瞥。

時折赤くなって立ち止まる男子生徒は、そんなあかりに青春を感じ取っているのだろうか。

「なに当たり前のこと言ってるんだよ。あかりって、もしかして馬鹿なのか？」

だが、その想いが実ることはないだろう。

美少女中学生なあかりが一途に想いを寄せているのは、隣を歩く雰囲気台無し男なの

だから。

「不憫すぎるっ」

「もう、ヒカルってばなんにも分かってないんだから！」

「はあ!?! 意味不明なこと言ってるあかりの方が分かってないだろうが!」

天下の往来で口論を始める二人の幼馴染を、可哀想なものを見る目を向ける金髪少女。

その様がより一層の注目を浴び、しかし罵り合いに夢中な二人は気付かない。

指摘をするのも面倒だと嘆息し、桜並木を潜った先には、区立葉瀬中学校の校舎が。

「ほら、二人とも。夫婦喧嘩はそろそろ終わりにしたまえ」

「誰が夫婦だ!」

「こそ、そうだよひーちゃん!?! 何言ってるの!?!」

「はいはい、ご馳走様でした」

「ひーちゃんのバカあ!?!」

真つ赤な顔でポカポカと背中を叩いてくるあかりに取り合わず、目指すは本校舎。目に映る景色は初めての筈が、進藤ヒカルとしての記憶を持つせいか、懐かしさも同時に込み上げてくる。

眺が緩み、片割れの記憶の感慨に耽るヒカリの大人びた表情。

ヒカルやあかりへ向けられていた視線が自身に集中することに自覚することなく。

下駄箱前に掲示されたクラス表に到着し、自分の名前を探そうと視線を動かす。

「やったあ、ヒカル達と一緒にだ！」

「げっ、あかりと同じクラスかよ!?!」

「お前等……」

色々と物申したい衝動を堪え、しかしと再びクラス表の方へ向く。

ヒカルやあかりの他に、同中出身の名前がチラホラと――

「はあ!?!」

「え、ウソ!?!」

瞬間、忙しなく動いていた視線が、一点へと固定。

それはヒカルとあかりも同じなように。

固まる自分達を、他の新入生達が訝し気に眺める。

だが、そんなことにも気付かないほど、目にした光景が信じられなくて。

「……………マジで？」

ヒカリ達が所属する、1年のクラス。

そこに記されているのは、本来ならばそこにはある筈のない名前だったのだから――



「新入生代表——塔矢アキラ君」

厳かな雰囲気に含まれる中、凜とした声が響く。

葉瀬中男子の学生服である詰襟、おかつぱ頭という古風な出で立ちの少年が壇上へと昇り、所作からも伺える凛々しい声で新入生代表の挨拶を始めた。

「あいつ、頭良かったんだ……」

前の席に座るヒカルが、呆けたように呟く。

「……ねえ、ひーちゃん」

「……何かね、藤崎君」

次いで、隣に座るあかりもそれに続く。

「……塔矢君って、海王中に行くって言ってなかったっけ？」

「……あたしもそう聞いてたんだけどね」

「……だよねえ」

何度見ても、何度も頭を振っても、壇上にいるのは塔矢その人。

見慣れた白の制服ではない、黒の詰襟を纏う姿は余りにも新鮮で、だからこそ違和感だらけだ。

記憶が確かなら、塔矢行洋の元担任が海王中学の校長という繋がりでの入学だった筈。

それが何故、近隣中学の中でも頭一つ抜け出ている有名私立な海王中ではなく、学力も進学率も平均な特段特徴のない葉瀬中なんぞに入学することになるのか。

「……………ははっ」

挨拶を終え、振り返った塔矢は一度立ち止まり。

百人を超える新入生の中から自分を見つけ出し、ニコリと微笑んできたではないか。同時に思い出したことがある。

塔矢の母親の母校が葉瀬中だったという話を、進藤ヒカルだった頃に聞いたというこ
とを。

「……………ストーリーカーかよ」

「ねえ、ひーちゃん。塔矢君が葉瀬中に来たのって——」
 「あー、あー。聞こえない、あたしには何も聞こえないー」

耳に手を当て頭を振れば、塔矢の紳士スマイルに中てられたのか、何人もの女子が赤面に。

だが、中身を知っている者としては、彼女達への同情は隠せなかった。

多くのプロ棋士が出入りする、そんな特殊な家庭で育った塔矢は、周りが大人ばかりだったために、同年代の馬鹿で喧しい男子とは違い、丁寧な対応はまるで王子様のよう
 で。

その実、人生全てを囲碁に捧げるあの男が、色事などに現を抜かすか——いや、ない。
 残念王子——そんな渾名を、ヒカリは心の中でそつと呟く。



「最悪だぜ、これから一年もこいつと毎朝顔を見合わせなくちゃならないなんて」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

片や机に肘付きぶつきら棒に、片は姿勢よく椅子に座つてすまし顔に。

入学式から一週間、学校生活にも慣れ出した頃。

ヒカルと塔矢から不穏な空気をを感じ取ったからか、一部の例外を除き、周りに座つていた連中は席を立ち、巻き込まれては堪らないと離れていく。

そんな様を、窓際最後尾という選ばれし者だけが座ることを許された席で見守る。

「二人も懲りないねえ」

「誰だよ、早々に席替えしたいとか言い出した奴。あの二人が隣同士とかシヤレにならないぞ」

「あんたもノリノリだったと思うんだけど」

「……教卓前とか晒し者みたいな席だったんだ。仕方ないだろ、金子」

「その晒し者みたいな席が、今の私の席なんだけどね……」

「津田よ、誰かが犠牲になるのは仕方のないことだ」

「うう……なんで私があ……」

「ど、ドンマイだよ久美子！」

幸薄そんな少女こと津田久美子をあかりが励まし、恰幅の良い金子正子はこちらに責めるような眼差しを寄越してくる。

その視線から逃げるようにクラス中を見渡せば、見覚えのある顔がチラホラと。

「ちつ……うるせえな」

「塔矢君に進藤君も！ け、喧嘩は良くないよ！」

罵り合う二人の間に割って入る、ヒョロリと背の高い男子生徒の夏目。

そんな彼等を鬱陶し気に一瞥し、机に突っ伏すのは三谷。

なんの偶然か、進藤ヒカルだった頃の囲碁部メンバーが、こうしてクラスメイトとなっていた。

「……記憶なんて、ほんと当てにならないね」

彼等彼女等を見ていると、つくづくそう思う。

自分の記憶の中に、こんな光景は在りはしなかった。

塔矢は海王中で、三谷達は別のクラスで、金子達とこうして普通に話すこともない。自分という存在が、進藤ヒカルだった頃に歩んだ歴史の中での唯一の違い。にも拘らず、こんなちつぽけな小娘一人だけで、現実はこんなにも変わってしまった。それがなんだか面白くて、可笑しくて、悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてしまつて。鞆を掴み、談笑を続ける女性陣を残し、騒ぎの渦中へと進んでいく。

「おーい、教室では静かにだぞ」

手でも上げながら気軽に声を掛ければ、親の仇を見るような眼で睨まれ。

相手が自分だと気付けば、途端に瞳を輝かせる。

「お、ヒカリじゃん。今から俺と打とうぜ！ 今日こそ置き石一個減らしてやるよ！」

「悪いが進藤、ヒカリと打つのは僕が先だ。第一、昨日最後に打つたのは君だろう」

「勝ち逃げなんかされて大人しく引き下がれつかよ！」

「そういうセリフは互先で勝てるようになってから言うものだ！ 第一、その理屈で言うなら僕にだって打つ権利はある！」

「塔矢のくせに生意気なんだよ！」

「事実を言つたまでだろう！」

そのまま何時もの対局の流れへ。

相も変わらず碁を喧嘩の道具か何かと勘違いしつつある二人に嘆息し、仕方がないと何時もなら彼等に付き合う形となるのだが。

「悪いけど、もう二人とは打たないよ」

ピキッと彫像と化すヒカルと塔矢。

まるで合わせ鏡のようなリアクション、実はこの二人って仲良しなんじゃないだろうか。

この世の終わりでも見るかのような顔の二人に、鞆から取り出した一枚の紙を突き出す。

「あかし、囲碁部に入るから」

ニヤリと、意地悪顔のままに。

「これから部活動で忙しくなるの。だから、二人の相手をしている暇はないのです」

そういう訳だからと、そんなセリフを残し。

ヒラヒラと手を振り、教室を出たヒカリが目指すのは、上階にある三年の教室。

新入生、それも異国の容姿をした自分が物珍しいのだろう。

不躰な眼差しには取り合わず、目的の教室へと到着。

後ろ側の教室出入り口から覗いた先には、見知った顔が二つ。

「筒井よ、なんなら俺の部員の何人かを貸してやってもいいんだぜ？」

「だから加賀！ 何度も言ってるだろう！ 僕の囲碁部に幽霊部員なんて必要ないって
！」

優等生に問題児。

対照的な雰囲気の二人を見遣り、知らず知らずのうちに口角が上がり。

より一層増す周囲の視線を無視したまま、先輩生徒——筒井と加賀へと近付く。

「なら、ちゃんとした部員なら歓迎してくれるってことですよね？」

突如割って入った自分に、二人は奇異の目を向けてきた。

「あ……………」

「……………君は？」

「新入生の後藤ヒカリ。筒井先輩が囲碁部を作ろうとしてるって話を聞きましたので」

対し、入部届を二人に見えるように翳す。

「囲碁部への入部届です。という訳で、よろしくお願いしますね。——筒井部長？」

ポカンと、現実理解が追い付かないのだろう。

やがて、眼鏡の奥の瞳に涙が堪り、感極まったように入部届ごと両手で掴まれ。

我が人生に春が来た——そんな空気に、筒井は包まれていた。

「う、うう……………うううっ!!」

「……言つとくがな、新入生。お前一人入ったところで、団体戦出場の規定人数の3人を満たさない限り、囲碁部は部活として認められねえんだぞ？」

《泣く子も黙る加賀》などと呼ばれ恐れられているが、その実面倒見の良い。

言葉にならない喜びに震える筒井に聞こえぬよう、耳元に口を寄せ囁いてくる、そんな妙なところで優しさを垣間見させる加賀に苦笑一つ。

「ああ、それなら問題ありませんよ」

言葉の後に、教室のドアが乱暴に開かれる。

「いたー！ 探したぞ、ヒカリ！」

「声が大きいで、進藤！ 此処は上級生の教室だ！ あと廊下は走るな！ 入る際には一礼だ！」

「だー！ お前はいつもいつも小言ばかり！ 塔矢は俺の母親か！」

前髪金髪におかっぱ頭な二人組の登場に、教室は更に沸き立つ。

ヒカルと塔矢が握り締めている見覚えのある紙に、ヒカりはしたり顔だ。

「囲碁部で忙しいと言うのなら、僕も入部して手伝う。だから、打たないなんて言わないでくれ」

「つーか、葉瀬中に囲碁部なんてあったんだな。知ってたら普通に入部してたのに」

その表情を維持したまま、珍しく絶句している加賀を一瞥。

「塔矢……だと……!?!」

次いで、機能停止に陥っている筒井に、会心の笑みを浮かべる。

「入部希望の男子、二人追加です。これで囲碁部は部としての条件を満たしましたよね？」

掴んだ両手を離し、眼鏡を外し、涙で溢れた両目を何度も、何度も袖で拭い。

「……うんっ、うん……!! ありがとう……後藤、さん……っ!!」

遅れるようにして、泣き笑いで筒井は応えた。

「よしっ! 囲碁部が出来たのなら、次は部員集めだ! 男子だけ団体戦に出れて、女子は出られないなんてわけにはいかないからね!」

もう、迷っている時間は終わった。

どうして進藤ヒカルとしての記憶が自分に宿っているのか。

その答えは、塔矢行洋との一局で見つけることが出来たのだから。

「あつ、ヒカリ! 部員集めは手伝うから、これから俺と打とうぜ!」

師匠が為し得なかった未練、塔矢行洋への完全勝利は果たした。

だから、これからは自分のために打とう。

進藤ヒカルとしてではなく、後藤ヒカリとして。

この世界にいる、数え切れないほどの碁打ちと打つんだ。

筒井や三谷、和谷、伊角、他にもたくさん――。

塔矢だって、塔矢行洋だって、神の一手を目指すヒカルと佐為とだって。何度も、何度だって、打ってやるんだ。

「ヒカリ、進藤との対局は後回しだ。まずは僕と一局打ってほしい」

でも、加減なんてしてやらない。

これから先、誰にも負けるつもりはない。

「あー……もう面倒だからさ、二人まとめてかかってきなさい」

ヒカルにも。

塔矢にも。

塔矢行洋にも。

そして、もちろん、姿を見ることの叶わない彼にだって。

「あだし、誰にも負けるつもりはないから」

挑発するように、嘲笑うかのように。

カチンときたのだろう、闘志を燃やすヒカルと塔矢の背後に、彼はいた。

嫺やかで、でも子供みたいに喜怒哀楽の激しい、ガマガエルが苦手な、最強の囲碁馬鹿。

二人に負けない、並々ならぬ対抗心を燃やし、こちらを真つすぐ見据えているのが分かる。

——負けないよ、佐為。

前世の師匠が、今世のライバルに。

なんの因果だろうと笑みが零れ、負けるもんかと心の活を入れ。

今日もヒカリは出会いに行く。

「さて、楽しい碁の時間の始まりだ！」

碁を打つことで会うことの出来る、自分だけの神様に。

自分の碁の中に息衝く佐為と一緒に、神の一手を目指すために――。